【完結】ポップになりました

妙義

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポップに憑依させられました。嫌だったので原作ギガブレイクします。

目次

1．ポップになりました ―――― 1
2．ヒュンケルって最低の屑だわ！ 10
3．モシャス＋パフパフ＝ＤＢでウーロンが亀仙人にやってた ―――― 17
4．モシャスがバグった ―――― 24
5．兄弟子想いの冤罪をかけられた弟弟子、家庭教師をする ―――― 33
6．北の勇者（笑） ―――― 41
7．ポップ君、調子に乗ってボコられマッスルデビルになる ―――― 49
8．ｖｓクロコダイン戦　魔界視聴率８０％超えを果たす ―――― 55
9．ＫＯＰ、スカウトされる ―――― 65
10．魔王軍、馬鹿を引き入れる。鬼岩城魔改造計画 ―――― 71
11．エイミ、拉致られる ―――― 75
12．エネルギー岩石生命体の禁呪法にあるものを混ぜてみた ―――― 79
13．フレイザードちゃん ―――― 83
14．ｖｓ竜の騎士バラン　ポップの本音 ―――― 89
15．ダイの大冒険、始まらない 101
16．フレイザードちゃんの日記

105
17．対人間会議 ―――――― 111
18．やっぱりダイが大冒険始めた模様。あとメルルが怖い ―――――― 116
19．リンガイア王国、地図から消える ―――――― 122
20．魔軍司令の外道策略 ―――――― 126
21．アバンとポップ ―――――― 130
22．でろりんって凄い名前だよなあ 136
23．キルバーン、メルルの策略に嵌まる ―――――― 141
24．闘魔傀儡掌使えるようになりたい ―――――― 146
25．オリハルコンの駒が恐怖に震えている ―――――― 152
26．”フレイ”と親友 ―――――― 157
27．少女の戦い パプニカの奇跡 163
28．フレイザードちゃん激おこ 174
29．オーザム乗っ取られ事件と魔王軍一武道会 ―――――― 179
30．ダイ君を回収する ―――――― 185
31．おじいちゃんの作ったマジンガーは無敵なんだ！ ―――――― 190

３２．卑劣なり魔王ポップ！ ―― 197
終．大魔道士と聖女 ―― 204
おまけ ―― 214

1．ポップになりました

星を求める蛾の願いとは英国のロマン派詩人であるシェリーの言葉である。やはり人は星に夢や願いを昔から思い重ねるものなのであろう。つまりある青年が夜になると、夢が叶った時の事を考え窓を開け練習を重ねるのもそれは必然といえるのかも知れない。ただ、それは小学生か中学生の時に普通は卒業しているもので二十代半ばにもなってまだ繰り返し練習を重ねている彼は、まあ控え目に言って馬鹿なのである。

「か～め～は～め……波！」

青年は今日も星に向かい、かめはめ波を練習する。青年は思った。今日こそは出そうな気がすると。なんか気っぽいものが溜まってる気がすると。何か一つ足りないものさえ埋めれば出そうだとアレンジを加える事にした。助走である。

「よし……あ～～!!」

勢い良く助走をつけた所に、彼は何故か偶然落ちていたコミックＬＯを踏みつけ、ずさーと滑り５階の窓からアイキャンフライした。

「おいーっす」
「……ん？」

まるで今は亡きいかりや長介の声が聞こえるようだと思いながら青年は目を覚ました。誰だと声のほうへ顔を向けると、巨大な竜のような生物が立っていた。

「……おいーっす」
「うるせえこちとら頭が痛いんだ馬鹿野郎」

何故か怒鳴られた青年は、それはさすがに理不尽じゃないですかねとドリフのようなやりとりをしてきた竜に思いながらも睡眠から目覚め、まだ回転の遅い脳みそをゆっくり働かせながら周囲を見渡す。周囲は純白で何も無い空間であった。目の前には竜。

……そうか、俺は死んだのかと青年は思った。死因はコミックＬＯである。死にたくなった。死んでるけど。

「そうだなお前は死んだな」

「ちょっ、いやまだ俺にはやらなきゃいけない事が！」

心を読んだ竜をよそに青年は慌てる。彼は死ぬに死にきれなかった。せめて、せめて部屋にあるコミックＬＯやパソコンのＤドライブの中身を消去してから死にたかったのである。恥ずかしさで死ねる。死んでるけど。

「まあいいや。じゃ、とりあえずダイの大冒険の世界だな」

「は？　いやいやいやいや。転生とか憑依とか嫌だし。面倒だし。しかもそんな死にそうな世界マジで嫌だし」

「で、お前はポップな」

「ファック！　こいつ一切聞いてねえ！　ポップとか本気で無理に決まってるだろうが！」

「じゃあいくぞ」

「あああくそ！　いいか！　絶対後悔させてやるからな！　誰が原作通りに動いてやるもんか！　めちゃくちゃにしてやるからなあああ……

……あああ！」

「おや？　目を覚ましたかポップ？」

「……へ？　……アバン先生!?」

「高熱でうなされ、やっと目を覚ましたかと思えば何やら混乱してるようですね？」

いやいやいやいやいや、なんで弟子入りした状態からスタートやねんと元青年であるポップが頭を抱えると、ポップの脳内に先程のドリフ竜の声が響いた。

『うるせえんだよ馬鹿野郎。お前冒険する気無かっただろうが』

『当たり前だろうがあああ！　安定した就職先あるのになんでわざわざ冒険者なんぞするかあああ！』

『魔法を尻からしか出なくしてやろうか？』

『ごめんなさい』

まったく……とぶつぶつ言いながら少しずつ小さくなる脳内に響く声。瞬間ポップの頭に割れるようなもの痛みが走る。ポップとしての弟子入りするまでの記憶が青年の精神にインストールされた反動である。

「いったぁ……」

「まだ熱が覚めていないようです。ゆっくり休みなさい」

ありがとうアバン先生。旅の中で毎日その変な髪型にセットするの大変じゃないですか？　と心の中で感謝しつつポップは再び眠りについた。

それから数日、アバンはポップの明らかな異変に気付きつつも彼を観察していた。今まで使えていた魔法を普通に使っただけで感動したり、旅の中で何度も見た事のあるモンスターを見て大騒ぎしていれば不審にも思う。だが、普段の細かな仕草に見られる癖は明らかにポップのものだった。

「……ふむ」

そしてポップはその数日を境に変わったようだというのがアバンの認識である。今まで面倒臭がっていた修行も真剣に取り組んでいるように見えたし、何より今までより明らかに旅の仕方というものを学んでいるように見えた。

そこにはポップとなった青年の思惑がある。原作を読んだ限り、レベルが低い状態でもメラゾーマを放てる才能がある肉体だが集中力不足で呪文の威力が安定していなかった節がある。マトリフの修行により魔法力の放出や魔法力を集中させる事を学んだ原作ポップは、そりゃあもう天才といっていい活躍を見せていた。

なので魔法使いとしての呪文の契約は全部終えている事は記憶で確認しているので、アバンのもつ呪文に関する知識や、旅に関する事さえ学べればポップはさっさとアバンの元から離れるつもりでいた。集中力が呪文の威力に関わる事はアバンも承知なのである。というか元々学者の家系であるアバンに一を質問すれば、必要な知識が十になって返って来た。ありがとうアバン先生。俺、立派な魔法使いになるよ。でも卒業の証は入りません。それ何で出来てるの？　ラーハルトの全力を受け止めれるネックレスとか凄い。

「ポップ」

「ふぁふひぇひょうあふぁんふぇんふぇい」
「ああ喋るのは食べ終わってからで結構です。最近の貴方はベリーグッドです。修行にも身が入っていますし、呪文を使う際もちゃんと集中して出来ています。なので貴方にこれを授けようと思いまして……」

そろそろアバンの元を離れようかなと思っていた時に、アバンから先手を打たれた。夕飯を食べている際にアバンがアバンのしるしを渡してきた。

「それ、なんですか？」
「これは卒業の証として……」
「いりません！」
「おや？　何故でしょうか」
「……ええーっとぉー」

不意討ちだった為に理由をまったく考えていなかったポップ。理由は原作に沿いたくないからというだけなのだ。いっそ頭おかしくなったと思われてもいいから本当の事を全部ぶっちゃけて、バーンの事まで全部話しといたらこの人ならなんとかしてくれ

ねえかなと思ったが、脳内にまたいかりや長介みたいな声で『ただし魔法は尻から……』という恐ろしい警告が聞こえてきたのでそれは辞めた。なんでや。原作ギガブレイクはしても怒らなそうなのにバラすのは駄目とかよく分からん。やるなら自分でやれってか。

「……まだまだ俺未熟だから。しばらく一人で旅をしてみて、またアバン先生に会った時に一人前になっていたら貰えますか？」

「ふむ」

何やら考えているアバン先生。しかしポップは思っていた。正直、別れたら会う気無いですと。

「……分かりました。貴方が成長した姿を見せてくれるのを楽しみにしていますよポップ」

「はい！」

いやーやっぱアバン先生は良い人だなぁと思いながら、翌日アバン先生に別れを告げ

一人旅を始めた。目的？　そんなもんこのドラクエ世界の観光に決まっとるじゃろー
がいと思いながら、特に何も考えてない頭空っぽなポップは一人旅に出るのであった。

2．ヒュンケルって最低の屑だわ!

ドラクエⅢをやった事があるだろうか。勇者一人旅プレイよりも勇者と魔法使い三人旅のほうが難易度が高いゲームだという認識をポップとなった青年はしていた。そして現在、彼は魔法使い一人旅である。凄まじい縛りプレイ状態である。彼は現在、パプニカの城下町に滞在していた。とりあえず近くにパプニカがあったからというだけの理由だが。

彼は一つ、試してみたい事があった。彼の聖書であるラノベ、スレイヤーズで主人公であるリナがやっていたマントの中は常に火属性の魔法や氷属性の魔法で気温をコントロールして快適な温度を保つというものである。リナは天才だから出来た。この身体の元の持ち主、ポップだって天才である。世界観が違ってもそれくらい出来るだろうとマントを購入し、試してみた。

「キャアアアア!!!」

「ぎゃあああ!!?」

ポップは街中で炎上した。目の前で急に炎上したポップ少年を見て悲鳴をあげる住民達と自分が燃えてパニックになったポップ。目の前でエクストリーム自殺を敢行された住民は間違いなく心にトラウマが出来たに違いない。

「うおおお!? ひゃ、ヒャダルコ! あああー今度はマントが全部氷付いた! 寒! メラ! あー! また燃えたー!」

往来で一人コントを繰り広げていたポップの元に騒ぎを聞き、バダックじいさんとパプニカの兵士達が駆けつけた。

「人が燃えてるじゃと!? い、いや氷っておる??」

「あちいー! メラミ! ヒャダルコ! 半分ずつでフレイザードなんつって! あちゃちゃちゃちゃ」

「……余裕がありそうじゃな。しかし……」

街中で騒ぎを起こしたハタ迷惑な少年を見ながらバダックは思う。マントを燃やしたり凍らせたりしながら自身にダメージを負わないというのは、魔法をよくは知らない

が高度な技術なのではなかろうかと。そして火炎系と氷系の中位の呪文を繰り返し唱え続けている少年は、もしかしたら凄い魔法使いなのかも知れない。ただし、馬鹿だとも思っていた。

「どうしたもんかのう」

一人で燃えたり氷ったりしている彼は、とりあえず実害は無い、多分。迷惑なくらいでいる。しかし、いつまであのマント燃えたりするのだろうか、灰にならんのかのうと思考がどうでもいい方向に悩み始めたバダックじいさんの背後から真空系呪文が唱えられた。

「バギ!」

「うぎゃあああ!!」

真空系呪文がもはや遊んでいたとしか思えないポップのマントを切り裂き粉々にした。ついでに衣服も切り裂いた。肌も少し切り裂いた。

「痛たたたた!?」
「往来で騒ぐからよ」

後から駆けつけたパプニカ三賢者の一人、マリンが傷付いてもがいているポップに声を掛けた。正論である。

「ていうか服着なさいよ」
「それは理不尽!?」

切り裂いたの何処の賢者だよと思ったポップだったが、なんとなく怖くて言えない。ここはあれしかない。こそっとアバンが持っていたから契約したあの呪文だ。

「しょうがない……出来るかな？　モシャス！」
「!?」

ポップはモシャスをとなえた！　パプニカのミニスカ賢者　マリンに変化した！

「おお、出来た出来た。これがご都合主義か……モシャスで服まで似せるってどういう原理なんだろう」
「メラミにヒャダルコにモシャスまで!?　何者なんじゃ!?」
「ちょっと！　なんで私なの！　早く変化解きなさい！」
「むさいおっさんより美人がいいのは当たり前なんだよなあ」
「……お主、ちょっと城まで来てもらおうか」
「嫌だ」
「こんだけ騒ぎ起こしたんだから素直に従いなさい」
「うるせえ！　この姿のままそこのジジイにパフパフしてその後この往来でストリップしてやろうか！」
「何！　パ、パフパフじゃと！」
「ちょっと！　じいさん喜ぶな！　なんて外道な事を考えるの！　この変態！」
「なんて奴だ！（マリンさんのストリップ！いいぞ！」
「鬼畜男め！（よし、はよ脱げ！」
「男の風上にも置けぬ奴！（お前は最高の男だぞ！」
「俺にもパフパフ！（この屑野郎！）」
「おっぱい！　おっぱい！（おっぱい！　おっぱい！）」

マリンはわなわなと肩を震わせて怒りを隠さない。だが他の兵士達はもしかしたらマリン（偽）のストリップが見れるかも知れないという状況に、まるで心の声が聞こえてくるように鼻の下が伸びている。

「なんて男……名を名乗りなさい！」
「俺か？　俺の名は……ヒュンケル！　イケメン銀髪戦士ヒュンケル様よ！」
「な……!?　じゃあ先程までの黒髪バンダナ間抜け面もモシャスだったとでもいうの!?
　く、ヒュンケルって最低の屑だわ！」
「……戦士は無理があると思うがのう」
「ヒュンケル……最低な奴め（お前がナンバーワンだ」
「ヒュンケルか、覚えたぞ！（ヒュンケルは最高の漢だぜ）」
「パフパフまだ？」
「おっぱい！　おっぱい！」
「フフ、そうだヒュンケルだ！　よく覚えておくがいい！　ではさらばだー！」
「待ちなさい！　変化解きなさい！」

マリン……じゃないヒュンケル……じゃなかったポップは逃げ出した。それを追い掛けるマリン。あのミニスカで走るとかそれだけでエロスを感じる。きっとふとももに釘付けのパプニカの兵士達もそう思っているはずだ!

その後、ほとぼりが覚めたかなとポップはマリンの姿のまま男物の服と下着を購入し、パプニカ城に請求してくれとマリンのサインを書いて去っていった。あとエッチな本もマリンの姿のまま買ってパプニカ城に請求させた。

後にマリンは（男を）賢者（モードにするエロミニスカ恥女）として、世界で名が売れ、世界中にファンが出来、多数のマリンに関する（エロい）本が出版される事となるのだが、ヒュンケルのせいである。

3．モシャス＋パフパフ＝ＤＢでウーロンが亀仙人にやってた

転生とか憑依したらさっさとマトリフから指導を受けるのがテンプレと、暇らしくたまに脳内に話し掛けてくる神もどきのいかりや長介竜が言っていたのでマトリフのエロジジイに会いに行く事にした。お前何回何人この世界に転生させて遊んでんだよと突っ込んだら、「だって話完結しないほうが圧倒的に多いし」と意味不明な事を言われた。

それはさておき、パプニカ王国の海岸沿いを散歩する事、二時間。ちょうど散策にも飽きてきた所でバルジ島がよく見える岬でそれらしい洞窟を見つけた。そういや島を目印に探したほうが早かったかと、とりあえず外から声を掛けると迷惑そうな顔をした人相の悪い鬼作さんみたいな顔をしたマトリフが鼻をほじりながらのっそりと出てきた。実にエロそうな顔をしているというのがポップの感想である。

「なんだ？　何のようだ」

不審者であるポップをじろりと睨み付けるマトリフ。だがもともとそんな対応されるだろうなと思っていたポップは、特に気にせずにエロそうなジジイに話をする事にした。

「凄い魔法使いがいるって聞いたから会いに来たんだけど」

「けっ、パプニカの城の奴に聞いたのか？　出て行け」

別にパプニカの人間に聞いた訳では無いが、否定するのもおかしいので塩対応に困ったくらいの反応をしたふりをするポップ。正直、ポップはすでに面倒臭くなっているので、結構帰りたくなっているのだが僧侶系の呪文の契約は原作でもマトリフの元でしていたので現在契約していない。とりあえずそれだけでもやっときたいポップは懐から一冊の本を取り出し、そっとマトリフの前に差し出した。

「……つまらないものですが」

「これは……!?」

目の前に差し出された本を一瞥し、ポップをギロリと睨み付けるマトリフ。

「てめえ、俺を誰だと思っていやがる……」

「いらない？」
「……けっ、入れ」

さっと差し出したエッチな本を奪いとったマトリフは洞窟の中に入るようポップに促した。やっぱエロじじいやんけ。扱いやすいわ。城でエロ本の購入代金の請求でテンパっているだろうマリンの犠牲は無駄じゃなかったと思うポップはクズで間違いない。

とりあえず洞窟に入ったポップは、適当にエッチな本の代償にと話し、雑に壁際に積んであった呪文の契約の書を片っ端から使わせて貰い契約していった。マトリフは一通り終わるまで何も言わずにポップが契約し終わるのをエッチな本を鼻の下を伸ばしながら眺めて待っていた。そして一通り終えただろうタイミングでマトリフが声を掛けた。

「てめえは魔法使いだろう？　何故僧侶の呪文の契約の書を使う？」

「だって使えるかも知れないだろう？」
「なんだ、賢者にでもなりたいってのか」
「いやー、賢者とか偉そうな名前は嫌かな」
「……ほう」
「ま、使えるかはわかんないけど契約しといて損は無いだろ？」
「ふん、変わった小僧だ。で？　契約は終わったのか？」
「大体は……一通り終わったかな？」
「その中には俺のオリジナルの呪文もあっただろう？　教えて欲しいか？」
「教えてくれるの？」
「さー？　どうしよっかなー？」

　また鼻をほじりながら言うマトリフ。どんだけ鼻ほじるねん。そのままブスっと奥まで差して出血多量で死ねとポップは思いながら、原作でそこまで活躍してなかったが、重力を操るというロマンを感じるベタンを使ってみたいと考える。重力を操る。かっこいい。このジジイが作り出したとはとても思えない。思えばメドローアもめっちゃかっこいい。何故呪文はセンス抜群のくせに呪われたベルトみたいな装備を作ってしまうのか。

……そういえば呪われたベルトって着替える時とか風呂の時とかもベルトだけは付けとかなきゃいけないのかね？

絶対付けたくないわ。

「……エッチな本が欲しいのか？」

「～～♪」

口笛を吹くマトリフ。当たりのようだ。分かりやすいな死ね。そしてポップは考える。このジジイの思い通りに動くのは嫌だと。口笛を吹いたその口の先に偶然爆弾岩が降ってきて爆弾岩とキスした直後にメガンテくらって死ね。……まぁ、思考回路が単純なエロじじいというほうがコントロールしやすいかなともポップは考えたが。

「モシャス」

「おお!!」

モシャスでパプニカのミニスカ痴女賢者（ポップの主観）マリンに変化したポップ。もうお分かりだろう。これなら元手はタダですむ。が、こいつはジジイに自分がそんな

事をするなんて気持ち悪く無いのだろうか。何も考えてないというのが正解なのだろう。

「教えてくれるならパフパフしてあげよっかな～♪」

「てめえは……！」

「センスはなかなかだが、如何せん魔力が足りねえな。ま、この俺が鍛えてやるんだ。一流の魔法使いにしてやるよ」

「ぐへぇぇぇ……」

とりあえず素質を見てやると言われた後、浜辺で原作のように魔力放出対決が行われ、挙げ句海にぶっ飛ばされたポップ。鼻に詰めたティッシュが真っ赤に染まったマトリフは、トベルーラで空中にプカプカ浮かび、海に浮かぶポップを見下ろしながら下品な笑顔でそう言った。

これはやばい。どげんかせんといかんと東国原が宮崎県知事になった時並みの決意

を命の危険を感じたポップは固めた。

どげんもならんかった。

4．モシャスがバグった

「ほらほらほらほら！　避けねえと死んじまうぞ！」
「ちょ、待てよ！」
「……だからそれは誰のマネのつもりなんだ。随分余裕有りそうだなあおい？」

マトリフがイオを、まるでベジータの連続エネルギー弾みたいにガンガン放ってくるのを慣れぬトベルーラを使用して空中で華麗に避けられる筈もなく、ボンボンボンボン被弾、被弾、また被弾。避けてる弾のほうが少ないという状態にポップの衣服はボロボロになっていた。いい加減この世界で相手から魔法を放たれる事に慣れたポップは絶賛死にそうです。

「ぐっへぇ……こんなん避けれるかバカ師匠！　エロじじい！　おっぱい魔神！」
「よーし、イオラに格上げしてやる」
「……いーのかなー。死んだらパフパフが無くなるんじゃないかなー？」
「く、生意気な小僧だぜ！」

そう言いながらイオラではなくイオを連発してくるマトリフ。このスケベじじい、欲望に忠実過ぎて笑えてくるわ。亀仙人かお前は。まあイオでも絶賛死にそうなんですが。避けれるかこんなもんとぶつぶつ言ってるポップを見てマトリフは不審に思った。あいつ何発イオ喰らって痛いって喚く程度で済んでいるのかと。そしてすぐにその秘密に気付いた。

「あーくそ、痛ててて」
「……ん？　おい」
「なんだよエロじじい」
「……お前、何をしている？」
「何って……あれ？」

ポップは自身の行動を考える。何してるかと言われれば、痛いから痛い場所に手を当てて魔法力を込めて傷を癒して……

「あ!?　これホイミだ!?」

「気付かずに使う奴がいるか馬鹿が」

　ポップは思った。いやいやいや、だって賢者に覚醒するのってポップの重大イベントだし。メルルとの大事なポップのイケメンイベントだし。え？　こんなにしれっと使えるもんじゃないよね？　何これマジで？　大事なイベント潰したけど大丈夫？　これでメルルフラグぽっきり逝ったとかないわーと。

「どうりで大量のイオ貰って生きてやがる訳だ」
「殺す気だったんかおい」
「いや、なかなか死なねえなと思っただけだ」
「……マジでてめえの寿命来る前にぶっ殺して墓にエロじじいって書いて小便ブっ掛けてやる」
「おーおー、やってみろヒヨっ子が。青二才に殺される程朦朧してねえがな」
「むっかー！」

　ポップは怒りに任せてトベルーラの速度を上げながら、片手で体を回復させつつマトリフのイオの光弾をギラで撃ち抜き、光弾を次々と爆発させながらマトリフに迫る。無

意識だろうが、三呪文を同時にコントロールし出すポップを見て思わずマトリフは唸る。

「ほう……」

マトリフの思惑通り、見事挑発に乗ったポップは神業ともいうべき呪文のコントロールを見せる。しかもトベルーラもホイミも覚えたてである。こいつ、センスあるなとマトリフは思うが口には出さない。どう考えてもポップは調子に乗るタイプである。そしてマトリフの事を単純エロじじいと言っているが単純なのはどっちだと言いたい所である。

「あっ」

慣れない事、それも高難易度の事を連続してやってみせたポップの魔力はあっという間に減っていき、呪文のコントロールを失い今までの攻勢が嘘のように見事姿勢を崩し一転落下。海に向かってゴーゴゴー。

「あ、やば、たすけ、へるぷ！」

ジャボンと落下した海で、丁度海中にいたマーマンの群れに襲われ慌てるポップを空中で胡座をかき、頬杖を突きながら眺めるマトリフ。

「……こいつは本当に拾いもんかも知れねえな」

くっくっくとイタズラを思い付いた子供のような笑顔を浮かべたマトリフは自身の周囲に、またイオの光弾を大量に浮かべる。追い込めば追い込むだけ面白い物を見せるポップにマトリフの嫌がらせが止まらない。

「ほーれ、助けてやるぞー」

「うぎゃー!!!」

マトリフは空からポップとマーマンの群れに向け、イオの光弾を雨のように降り注いだ。勿論、ボロボロのポップに直撃はしないようコントロールしてだが。ただ今のポップにそんなマトリフのコントロールなど分かる訳もなく、バタバタ泳ぎながら必死な形

相で避ける避ける。何しやがるだのクソじじいだのギャーギャー叫びながら避ける様は正直端から見ると余裕を感じる事がマトリフをこういった行動に駆り立てるのだが、その辺りをポップはまったく察していなかった。馬鹿だからである。

「……うん？」

気が付くと、ポップは同じ境遇におかれテンパっていたマーマンと抱き合いながらお互いに協力し避け始めていた。野生のモンスターと協力して。そのポップの行動にマトリフの心中には感心と呆れの両方の感情が浮かぶ。

「ほんと変な奴だぜ……な!?」

ポップとマーマンは、お互いに降り注ぐ光弾を避けながら目を合わせた瞬間に通じあった。爆撃してくるじじいをぶっ殺してやりたい気持ちが一つになったのだ。マーマンは無言で頷き、ポップを自身の背に乗るように促す。ポップもマーマンの意思を読み取りマーマンの背に乗った。お前いつ魔物使いに転職したんだよと言いたくなるが、こいつは何も考えて行動していないので突っ込んでも突っ込んでも阿呆面で「何の事

？」と返してきそうなので突っ込むだけ無駄である。

ポップはマーマンの背に乗り、残り少ない魔力で光弾を撃ち落とし、マトリフに一泡吹かせる方法を考える。その時、ポップの脳内にいかりや長介竜が囁きが聞こえた。『モシャスを使え』と。

「……モシャス！」

ポップは光弾を撃ち落とせる者になりたいと考えながらモシャスを唱えた。その姿にマトリフは驚く。薄めの黄色の肌（？）に星条旗をあしらったベストとジーンズ。テンガロンの四次元ハットに左腕には空気砲。髭が長く3対生えており、首周りには保安官バッジをつけたスカーフを巻いている。そう、ザ・ドラえもんズのドラ・ザ・キッドに変化した！

「な……に!?　黄色いタヌキのようなモンスターに？　モンスターなんかにモシャスして何する気だ？」

モシャスは姿見を変えるだけの呪文である。そう、そのはずだった。

「ドカンドカンドカンドカンドカンドカンドカンドカンドカンドカンドカンドカンドカンドカンドカンドカンドカンドカン!!!」

「なにいいいい!!?」

ポップ、もといドラ・ザ・キッドは百発百中の空気砲で光弾を全て撃ち落とす。脳内のいかりや長介竜は言った。『声優一緒だから能力コピーしてもセーフ』と。チートですねわかります。ちなみに二分の一の確率で失敗して機動戦士Zガンダムのカツ・コバヤシになります。ニュータイプのくせに余所見して隕石ぶつかって無駄死にしそう。

全ての光弾を撃ち落としたキッドはその手の空気砲をマトリフに構える。

「死ね!」

ポンッ!

死ねと叫んだ瞬間、モシャス（ｃｖバグ仕様）が切れた。燃費もクソ悪い模様。そして汗をたらーっと流したポップはマトリフに言う。

「……今の死ねは無かった事にならない?」

「なるか！」

再び光弾を大量に浮かべ、ポップに向かって雨霰とイオを降り注ぎながらマトリフは考える。いまの変化は何だと。あいつは本当に何者なんだと。しかし、いま海でマーマンと逃げ回ってる姿はやはり間抜けにしか見えなかった。マトリフは、まだポップを計り兼ねていた。

その日、ポップはマトリフにマリンになってパフパフをする振りをしてマトリフが目を瞑った瞬間にバダックじいさんになり、じじいの胸板にじじいが飛び込むという酷い絵面になるイタズラを仕掛けたらマトリフが本気でキレたので、アバンの兄弟子のヒュンケルに教わったイタズラだという事にした。マトリフの目がまじで恐かった。

5．兄弟子想いの冤罪をかけられた弟弟子、家庭教師をする

マトリフのクソじじいの修行とかいう苦行を強いられた日々を過ごした結果、結構呪文を使いこなせるようになった。バグモシャス以外は。四連続カツ・コバヤシになるとかほんと何なん。勘が多少良くなろうがクソみたいな身体能力でどうしろっていうんだよ。

まあ何だかんだトベルーラもルーラもベタンも使いこなせるようになって、マトリフが「後はてめえで修行しろ。本当にどうしようも無くなった時に泣きついてこい。そん時はとっておきを教えてやる」とメドローアフラグをくれたので、最後にマリンになっていつもよりパフパフしといた。

やりたい事を色々考えていたが、とりあえず旅支度をしようとパプニカ城下で準備を整えていた所、パプニカの兵士に取り囲まれ捕まりました。正直飛んで逃げても良かったし、全員イオラで爆破しても良かったけど手配とかされたら面倒だったので流れに任せて無抵抗でしょっぴかれた。という訳で何故かパプニカ城の玉座の前でロープぐる

ぐる巻きにされて正座させられてます、ポップです。いやいやそこは牢獄とかじゃないの？　と思ったけどまあ何も言うまい。

ちなみにパプニカ三賢者にちょい幼いレオナ姫、それにパプニカ王と王妃がいる。なんか読み切りでキラーマシン使って悪さしてた偉そうな奴と間抜けそうな奴もいるな。あとバダックじいさんも。なんでこんなに揃ってるんですかね？

「こいつです！　このヒュンケルがモシャスを使って街で悪さをしていた奴です！　私に化けて勝手に……へ、変な物を買ったのもこいつです！」

「あ、初めましてポップです。兄弟子のヒュンケルを知ってるんですか？」

ぷりぷり怒っているエロ賢者マリンにポップは惚け面で挨拶をする。その言葉に呆気に取られるマリン。お前仮にも『賢者』とか言う肩書きならもうちょっと賢い感じだせやと思うが、原作でそんな雰囲気の賢者なんか一人もいなかったからしょうがないね。ていうかお前が怒ってるから落ち着かせる為に皆集まってる感じか。迷惑な奴め。

「あ、兄弟子ですって？」

マリンが何を言ってるんだと言う表情になったので、ポップは今だと会話の流れを取りにいった。この男、普段は阿呆だがこういう時だけは頭が回る。ほんとクズである。

「ヒュンケルはアバン先生の一番弟子ですから。あの、なんで僕は縛られて連れて来られたんでしょうか」

「勇者アバン殿の!?　……ちなみに貴方の知っているヒュンケルの外見の特徴は?」

アバンの名を出した事で、周りも「アバン殿の……?」と興味を一気に引く事が出来たようだ。この流れならイケるとポップは確信する。

「ヒュンケルは銀髪でイケメンです」

「確かに彼の言っていた外見と一致する。……貴方もアバン殿の教え子なの?」

「はあ、アバン先生に勧められて先日までマトリフ師匠に師事してたので、正確には二人の教え子になりますが」

「二人の教え子であるという証拠は?」

まだ訝しげなマリンに同じく三賢者である妹のエイミがある指摘をした。その指摘

はポップに精神的ダメージを与える。

「見て、あのくそダサいベルト……。あんなくそダサいマトリフの顔のバックルのベルトを付けてるなんて彼の弟子に違いないわ」

そう、ポップは寝ている隙にあの呪いのベルトを装備させられていた。マジで取れないでやんの。どういう仕組みだよこれ。どんなに頑張っても取れない。ギラで焼き切ろうとしたけど取れない。教会に行って「取れませんか？」って聞いたけど、「そんな事言われても……」みたいな顔された。ドラクエなら教会でなんとかしろやボケがと思ったが、そんな下品な事を口には出せないので夜中、教会の外壁に『ひゅんけるさんじょう！』ってデカデカと家畜の糞で書いといた。

「確かに……あの難癖あるマトリフに弟子入りするなんて、確かに勇者アバン殿の紹介でもないと無理でしょうね……。その子の縄を解いて。ごめんなさい、ヒュンケルは貴方の姿にモシャスで化けて街で悪さをしていたの」

「そんな……、確かにヒュンケルは人間の屑みたいな奴で下劣でスケベで変態だけどそんな事をするなんて！」

「兄弟子である人がそんな事をしていたなんて、確かに信じられないかも知れないけど……事実なのよ」
「何かの間違いじゃないんですか!?　確かにヒュンケルはモシャスの一流の使い手で各地で色々な悪さをしているビチグソ野郎だっていう噂を聞いてはいますが、そんなの信じられない！　だって、だってあいつはアバン先生の弟子なんだから！　アバン先生の名を汚すような真似をするなんて！」

　ドン！っと床に両腕を叩き付け、心の底から打ち拉がれたような様子を見せるポップ。そのポップの姿を見て皆、同情した。また、同時に彼の先生であるアバンを本当に尊敬し、大切にしている様に心を打たれていた。実際まったく本当にそんな事はない。ないんだよ。

「ポップ君……」
「ポップ君、信じられないかも知れないがヒュンケルがこのパプニカで、まあ大した事はまだしてないんだが、往来で迷惑を掛けたのは事実なんだ」
「大した事してないですってえ！　私に化けて変な物を勝手に買って迷惑かけられてるの、私なのよ！」

ぷりぷり怒っているマリンの怒りはまだ収まっていないようだ。まあ別にフォローするつもりは一切無い。だってポップに怒っている訳では無いのだから。ポップ的には的を完全に逸らしているのでマリンの怒りなど結構どうでもいいのである。

「お、落ち着いてマリン」

「しかし、ヒュンケルという者は他の国でも悪さをしているのか。他の国の王族にも伝えておかねばな」

パプニカ王が、なんか話を勝手に大きくし始めた。ヒュンケル、世界各国で警戒されるの巻。まあいっているの魔界だろうからどうでもいいか。ほっとこ。とりあえず話だけ繋げよう。

「そんな、（これから色々な国で）無銭飲食とか下着泥棒をして（ヒュンケルに罪を押し付ける予定で）いるって（俺の中で）噂があるだけで……、情けない兄弟子で申し訳ありません。アバン先生が知ったらきっと悲しみます……、うう……」

「泣かないでポップ君、君は何も悪くないんだから」

「そ、そうだポップ君、君は二人の先生に師事したんだろう？　どれくらいやれるんだい？」

パプニカ三賢者の一人であるアポロがポップの様子を見て話題を変えた。床に向けられているポップの顔は完全に悪い顔で「計画通り！」と某デスノートの某月君になっているが床しかポップの顔は見えていないので誰も気が付かないよ！

「……どれくらいかって言ったら怒られそうだから言いません」
「そう言われると気になるな。正直に言ってくれて良いよ？」
「マトリフ師匠は、パプニカの城の人よりは強いとか言ってましたけど……、まあ師匠の言う事なのでその辺りは話半分に聞いてますが」
「へえ、それはもちろん魔法でっていう事で良いかい？」
「はい。あ、まあ師匠が言ってた事なんで怒らないで下さいよ？」

ちなみにマトリフはそんな事一言も言ってない。ただマトリフのせいにしてアポロを挑発しているだけである。一切自分の言葉に責任を持たないクソ野郎である。

そしてその後ポップの実力を見るという流れになり、アポロが自慢（笑）のフバーハを張り、「さあ、どこからでも来たまえ」とか言ったので、アポロをベタンで圧し潰した。フバーハ張ってる奴に炎とか氷系の呪文なんて使わないよバーカ。そしてその実力が買われ、何故か臨時でレオナ姫の家庭教師を少しだけする事になった。俺が言うのもなんだけど、流れがガバガバ過ぎませんかね？　まあアバンとマトリフの教え子って言うのはブランドとして使えるようだ。しかしまだ原作開始数年前のクソガキなんだけどね、俺。仕方ないのですんげえ適当に「いいよーその調子」「あ、いいねー」「あーその感じ最高」とか言ってたら、何故かレオナ姫がイオナズンを覚えました。魔法力足りないからまだ一発で力尽きるみたいだけど。

……それ使えたらダイとのデルムリン島のイベント変な事になりませんかね？　まあいいや。俺知らない。さっさと無責任にパプニカから離れる事にした。さーて次は何処に行こうかなあ。

6．北の勇者（笑）

リンガイア王国。この世界の中央に位置するギルドメイン大陸の四大王国の一つである。ギルドメイン山脈の北方に位置しており、城塞王国と呼ばれている。後々の事を知っていれば、城塞王国（笑）である。相手が悪かったせいであるが、たった一週間で壊滅させられた国である。まあバランが本気出してたらドルオーラで一日で終了してたから遊ばれた結果の一週間が短いか長いか正直分からないが、ようは超竜軍団しゅごい！　バランしゅごい！　という描写に利用されただけの国である。そしてその後、ピラァ・オブ・バーンまで投下され廃墟すら消滅してしまう悲しい国でもある。

そんな悲しいリンガイアに一人のクソガキがやってきた。ポップである。ポップがリンガイアにやってきた理由。それは「どうせ滅びる国なんだから何やっても平気だろ」とかいう最低な理由である。

さて、この国の出身といえば北の勇者と言われるノヴァ君がいる。おそらく独学で身に付けたであろう、ヒュンケルやヒムのように闘気を使って戦う事ができる子なんです。そして作中、人間側では他にポップとマトリフしか使えなかった上位の攻撃呪文ま

で唱える事が出来るのです。有名な師匠も持たずにである。こいつガチの天才だと思う。しかも闘気と魔法の両方を使えるのは、劇中では竜の騎士であるダイとバラン、魔族であるハドラーとバーン、そしてアバン先生とノヴァの六人だけである。マァムはあれ魔法だからね。そして魔界の魔物相手でも周りが傷ついている中でほぼ無傷で負けていなかった。しゅごい！

デビュー戦の相手がオリハルコン軍団とかいう最強クラスで無ければ勘違い野郎で噛ませ犬とかいうポジションに入らなかっただろうに。というか初期ハドラーくらいならノヴァ君なんとかしそうな気がする。なんせオーラブレードはオリハルコンすら傷つける事が可能な技であり、ノーザングランブレードに関しては、その当時最強技だったダイのライデインストラッシュも真っ青の威力だと目を丸くしたポップが評している程の技である。まぁ防御したヒムは「柱の角に頭をぶつけた」程度とか言われたので、確かにノヴァ君の心は折れるものがあったであろうと同情を禁じ得ない。相手が悪かったね。合掌。

今、リンガイアは祝賀ムード一色であった。リンガイアにとって厄介であったモンスターをノヴァが単騎で討伐を成し遂げたのである。その功績でノヴァがリンガイアの勇者、北の勇者と認められたという。ロモスでクロコダイン倒した時のダイみたいなも

んだね。城のバルコニーから顔を出して民衆に手を振るノヴァ。とても喜ばしい事であるのにも関わらず、ノヴァの顔には若干の影があった。勇者としての重責に緊張してるのかな？

そのノヴァを建物陰からこそっと見て邪悪な笑顔を浮かべる小僧がいた。我らが腐れ外道、ポップ君である。

城から出てきたノヴァが街道を歩いていると、物陰から声を掛ける人物がいた。やはりポップ君である。登場の仕方が悪役である。

「ようノヴァ、さっきは楽しそうに手なんか振っちゃってたなあ？」

「お、お前は……ヒュンケル……」

ポップ、またヒュンケルの名を語るの巻。

「くっくっく、勇者（笑）なんか名乗っちゃって恥ずかしくないの？」

「き、君が僕が一人で討伐した事にしたんじゃないか！」

そう、偶然討伐現場に遭遇したポップ。そのままノヴァ一人でモンスターを倒せそうだったので、後ろからこっそり魔法でノヴァを不意討ちしてモンスターを助け、ノヴァ

が大ピンチになった所でノヴァを助けるとかいうマッチポンプをやって、ノヴァを恩着せがましく助け出したのだ。その後、駆け付けたリンガイアの兵士に「ノヴァは一人でモンスターを倒した」と言い、ノヴァに「黙っといてやるからな……」とボソッと言ったのである。

　ようはこの男、この状況を利用して最大限に遊ぶつもりである。最悪どうなっても潰れる国だから何してもいい精神である。お前リンガイア助けようとか思わないのかよと思うだろうが、この男は思わない。思わないったら思わない。クズだから当然とも言える。

「あ、良いのかなー？　本当の事バラしちゃおっかなー？」
「な!?　君が黙っておくと言ったのだろう!?」
「黙っておくと言ったが、いつまでとは言ってないんだなあ」
「なんて奴だ……」
「あれれー？　そんな口の聞き方していいのかなー？」
「くっ、な、何が望みだ！」
「そうだなー、うーん。よし、ちょっとナンパしてこい」
「……は？」

「いいからナンパしてこい」
「な、何故僕がそんな事を……」
「いいからしてこいっつってんだよハゲ」
「僕はハゲてない！」
「なんだ、勇者ってのはナンパのひとつも出来ない腰抜けなのか。あー分かったよ。勇者様にはナンパなんて難易度高過ぎて無理でしたね」
「なんだと！　……分かったよ、やってやる！」

タッタッタッと駆け出して往来でナンパをぎこちなく始めたノヴァの様子を見て、ポップはその辺にいた住民に声を掛ける。
「ねえねえ、あれ見て下さいよ」
「あ？　なんだお前」
「いいからいいから。ノヴァが勇者になった途端に立場を利用して女を引っ掛けようとしてるんですよ。ゲス野郎ですね」
「な……、ほんとだ。あいつ調子に乗りやがって」
よし！っとポップは次々に住民に声を掛けてノヴァを陥れに掛かった。なんでそんな事をしているのか？　こいつにとってただの暇潰し以外の理由なんてないよ！

「ヒュンケル！　貴様ー！」
「ん？　ノヴァどうかした？」
「どうかしただと！　貴様のせいで国中に僕の悪口が拡がっているじゃないか！」
「ナンパしてたのは事実だろ？」
「それだけじゃない！　さっき父上から呼び出され『勇者としての自覚がまったく足りない！』と怒られたんだぞ！」
「で？」
「お前ちょっとは！」
「ナンパで引っ掛けた娘とはどうだったんだ？（頭が軽そうな）可愛い娘だったじゃん」
「……」

　黙ってしまったノヴァを見て、ティーンとポップが閃いた。そしてノヴァの肩を叩き同情したような表情で言ってやった。

「誰でも初めは緊張して失敗するもんよ。童貞野郎」

「殺す！」
「けっけっけ、やっぱり卒業出来て無いでやんの」
「殺してやる！」

ノヴァはいきり立ち、抜刀した。そこまで確認してポップは大声で叫ぶ。

「助けてー!!　勇者ノヴァに殺されるー!!」
「な!?」

叫んだ後、地面にうずくまったポップ。何事だとワラワラ住民が集まってきた。そして騒ぎを聞き付けたリンガイアの兵士達もやってきた。ノヴァは激しく動揺した。
「何事だ！」
「……ノヴァに調子乗ってんじゃなくて勇者としてしっかりしろと言ったら襲われました」
「ひ、ヒュンケル貴様！」
「なんだ痛い所を突かれて逆上したのかノヴァは」
「調子に乗りすぎだよな」

「じゃなきゃ急に往来でナンパなんかしないよな」
「でも童貞臭い顔は変わってないね」

住民から熱い非難の声を浴び、ノヴァはがっくり肩を落とし口から魂が抜けたような顔になった。そして城に連れて行かれ、また父親に雷を落とされる。人間不信になったノヴァは、その夜リンガイアから人知れず修行の旅に出た。きっと原作より強化される事になるであろう。

そして人知れず旅に出たはずのノヴァがリンガイアでナンパしている姿がしょっちゅう目撃される。更に「俺は勇者だぞ」と言って横柄な態度をとっている様子も目撃される。

当然、モシャスで化けたポップ君である。誰かこいつなんとかしろ。

7．ポップ君、調子に乗ってボコられマッスルデビルになる

拳聖ブロキーナ。アバンが対魔王ハドラー相手に凍れる時の秘法を使う際に、大魔導士マトリフと共にパーティーを組んだ武術の神様と言われる達人である。くそ強い。何故この三人で当時のハドラーに苦戦したのか。まあ二人ともじじいでスタミナに難があるから……で無理矢理納得しとこう。スタミナに難があるじじい二人に時間を稼がせるアバン先生エェェ。

ロモスの山奥に住むブロキーナ老師の元へ一人のクソ野郎がやってきた。ここに来たのは偶然である。スカイドラゴンとトベルーラで競争をしていたら魔力が尽きて落下し迷子になっていただけである。馬鹿だね。

「ギャン！」
「ほっほっほっ。まだやるのかの」
「ぐぎぎ……まだまだああ！」
「ほい」

「ズッゴック!?」

　現在ポップはボッコボコにされている。ブロキーナブートキャンプに参加しているような状態にある。説明しよう！　ブロキーナブートキャンプとは、武道家に転職してたった一ヶ月しか修行してないマァムがダイ達と合流したら最前線で敵と殴り合う事が出来る程実力が付くとかいうあの伝説の修行である。何故、ブロキーナに修行を付けられているのか。ブロキーナが空腹で倒れていたポップを偶然見つけ、助けたら性根が腐りきっていたので叩き直している最中である。さすがオバケネズミに人語を教えれるじいさんは違うね。作中一番魔物使いらしい描写があるのが武道家とかどうなってんの。

　一つ、大事な事を言えば別にポップは魔法使いを辞めていない。ただ、殴られてむかつくから一発殴りかえしたいだけの精神である。性根が腐りきっているので再生不可能です。新しい根っ子持ってきたほうが早いです。

「くそ、一発も当たらねえ！」
「何が足りないか分かるかポップよ」
「足りないもの……そうか、筋肉か！」

「そうそう筋肉……ん？」

ブロキーナは邪念やらなんやらを諭すつもりだったが、ポップの予想より斜め上の返答に困る。わし、筋肉そんなに無いけどと言わんばかりにブロキーナは力こぶを作って見せる。

「わし、あんまりないよ？」

「いや、そもそも筋肉があれば殴られても平気なはずだ。俺に分厚い筋肉さえあれば……そうだ！　老師、一ヶ月だ！　一ヶ月後、また老師に会いに来るからな！」

「うん……？」

ダダダダダダーっと明後日の方向へ駆け出したポップ。ポップはある修行を思い出した。身体に重力を何倍も掛けてトレーニングする、ドラゴンボール方式の修行である。

「ベタン！　ぐはぁ」

さっそく自身に向けてベタンを放つ。当然潰れる。

「ま、負けねえぞぉぉぉ！」

なんだかんだ真面目にトレーニングし始めたポップ。マトリフの時もやり返したいからという気持ちが強かったから修行を続ける事が出来たのだ。以外と反骨精神旺盛である。正義の味方側の精神してない。絶対ミナカトール出来ない（確信）

そして自身にベタンを掛け続けて一ヶ月後、ズシン…ズシン…と音を立て、一歩一歩ゆっくり歩く筋骨粒々の男がブロキーナの元に再び現れた。ドラクエⅢでいうカンダタやオルテガ並みのマッチョっぷりである。たった一ヶ月と思うなかれ。この世界の一ヶ月半端無いんやで。

「ふはははは！　どうだじじい！　この鍛え上げたこの筋肉は！」

「わし、今おしりぴりぴり病」

「そうか怖いか！　ふはははは！」

「やれやれ、聞いとらんのう」

「じゃあ行くぞじじい！」

「ひょいっとな」

「何！」

ポップの大振りの攻撃を危なげなくあっさり避けるブロキーナ。ポップは拳を、蹴りをいくら繰り出しても当たらない。
「くう、何故だ！」
「動きに無駄が多いからの」
「そ、そうか！　筋肉が足りないのか！」
「……うん？」
ブロキーナは首を傾げる。会話にならない。脳まで筋肉になっているようだと感じた。
「やれやれ……」

「土竜昇破拳」
ブロキーナは地面に両腕を叩き付けた。ポップの足元の地面が爆発しポップの身体が宙に浮いた。
「な!?」
「猛虎破砕拳！」
「ハイゴッグ!?」
宙に舞い無防備になったポップの身体に武神流最強の物理技を放つ。ポップは悲鳴

を上げながら派手にぶっ飛び、でかい図体がゴロゴロと転がっていった。当然気絶した。

「やれやれ、こいつは……面白いがやっかいな奴じゃのう」

一ヶ月で自身の身体をカンダタスタイルに作り替えたポップの腰に巻かれているマトリフのベルトを見ながらブロキーナは言う。

「まあなるようになるか」

ブロキーナはポップの片足を掴み、巨体をズルズル引き摺りながら家に帰っていった。

8．ｖｓクロコダイン戦　魔界視聴率８０％超えを果たす

ポップは拳聖ブロキーナにボッコボコにされまくりながら、ブロキーナが拾ってきたチウに言葉を教えまくったりして修行の日々を過ごしていた。

「老師！　うんこって美味しいね！」
「チウ、それは木の実と言うんじゃ。うんことは排泄物の事じゃ」
「ええ!?」
「プークスクスクス」
「ぽ、ポップまた騙したな！」
「うんこ食べて美味しいですかチウさんや」
「やめんかポップ。……またポップのヒュンケルとやら仕込みのいたずらか」

実に美しい師弟愛である。ポップはマホイミと閃華裂光拳以外の武神流の技をブロキーナから学び、また自身が前世で大好きだった漫画の技をブロキーナと相談しながら

完成させていった。ブロキーナはマホイミをポップには教えなかった。ブロキーナ、正しい。

「老師、お世話になりました」
「うん、もう来ないでね」
「ポップ、早く死んでね」
「はは、今度会う時はカメハメ百殺法を完成させて試し切りをチウでしてやるよ」
「４８の殺人技の練習台に散々しといてよく言うよ！」
「……ポップ」
「じゃあそういう事で！」
「はあ、お前という奴は……」

ポップはブロキーナ達との別れを惜しみながらも、新たなる旅に出た。目的地は無い。目的も無い。相変わらず適当な旅である。

ポップが適当にぶらぶら歩いていると、いつの間にか魔の森の中にたどり着いていた。魔の森。ロモスがあるラインリバー大陸を覆う巨大な森林帯である。魔の森に隣接しているネイル村という村があるが、そんなやばそうな名前の森の近くにわざわざ居

を構える変態さん達だと当時ダイの大冒険を見ながら作者が思ったのは余談です。

ポップがさ迷って辿り着いた場所。
そこには何故かリングがあった。
そのリングは何故かモンスターに囲まれて、モンスター達が声援を送っていた。
ポップはその様子を見て思った。
「目立ちたい」と。

『勝者、第8代魔の森ヘビー級王者クロコダイーン！』
『『『ホワアーーーー!!!』』』

リング上で観客に向けて手を降るピンク色のワニ、みんな大好きクロコダインと見事王座防衛を果たした王者に声援を送るモンスター達。ここだけ完全に世界観がおかしい。

その時、突如リングにバラが吹き乱れた。リングを完全に覆い隠す程の大量のバラ。

「むううん！」

クロコダインは手にしていた真空の斧を振りかざし、バギの効果でバラを吹き飛ばした。なんでリングで斧持ってるんだって？　そんな細かい事どうでもええやん。

バラが吹き飛ばされるとコーナーに一人の男が立っていた。ポップである。モシャスで魚座のアフロディーテに化けたポップはバラを大量に吹き荒らし、そーっとリング内に侵入してモシャスを解いたのである。アフロディーテの無駄遣いである。しかし、このド派手な登場に一気に観客のボルテージが上がった。今、リングの主役は王者クロコダインではない。バラと共に現れた謎の男、ポップである。

「何者だ貴様！」

「俺か？　俺は貴様を倒す男だ！　貴様のベルト、この俺が頂く！」

「な、何!?」

『おーっと！　突如現れた謎の男が、我らが王者クロコダインに挑戦状を叩きつけました――！』

『『『ホワアーーーー!!!』』』

興奮して叫ぶ実況席の腐った死体と、観客席のモンスター達。この流れは止められない。もちろん王者クロコダインも、プロレスの空気は生物だと理解していた。この空気を読めぬ男ではない。

「ふ、ぐふふ。良かろう。人間風情がこの俺に挑戦するか。捻り潰してくれる！」
「そうこなくっちゃ！」

『王者クロコダイン、この挑戦を受諾ー！　連続の防衛戦となります！　いやー、今日の観客はラッキーですねー。さあリング上では審判によるボディチェックが行われております。解説のマァムさん、初めての人間の挑戦者が現れましたがどう思われますか』
『無謀ですね。たかが人間が勝てる相手ではありません』
『マァムさんの言う通りであります。同じ人間であるマァムさんも王者の勝ちを確信しているようであります』
『ただ、あの人間もなかなか鍛え抜かれた身体をしていますね。良い筋肉です』
『確かに良い筋肉です。さあ、悪魔の目玉を通じて魔界全土に放送されている魔の森プロレス、今日は放送を延長してお送りします。謎の挑戦者……今情報が入りました。

ポップ選手が王座を防衛したばかりのクロコダイン選手に挑戦致します。』

カーン

『さあゴングが鳴りました！　リング中央でがっぷり肩を組み力比べから始まりました！』

『オーソドックスなレスリングスタイルですね』

『さあ勿論上背があるクロコダイン選手がポップに上から重圧を掛けていきます！　これはポップ選手も堪らないはずであります！　まるでショベルカーが廃棄物を押し潰すかのように、クロコダイン選手の圧力がポップ選手に襲いかかります！』

『いや、見て下さい。ポップ選手堪えていますよ』

『なんと驚きであります！　人間であるポップ選手が王者の圧力を受けて、耐えて見せています！』

『『ホワアーーー!!!』』

「なかなかやるなポップとやら！　だがこれはどうだ！　カアアーーー!!!」

「!?」

『で、出たー!! クロコダイン選手のやけつく息だあー!』
『王者の必殺のパターンですね。これで動きを止め一気に畳み掛けに行く常勝パターンですが……ああ!? 見て下さい!』

「な、何い!?」
「ふっふっふ、貴様のやけつく息など、師匠の老化した肺から出るくっさい息に比べれば平気というものよ!」
「なんだとお!!?」

『おーっと! なんという事でしょう! ポップ選手、自身の師匠の息より臭くないから平気だと言っております! マァムさん、これはどういう事なんでしょうか!?』
『わけがわかりませんね、死ねばいいと思います』
『マァムさんの言う通りであります。さあリング上では動きがあります。やけつく息は効きませんでしたが、王者、ポップ選手を力任せにロープに振るようです』
『ロープから跳ね返ってきたポップ選手を真空の斧で切り裂くつもりでしょう』

『リング中央で待ち構えるクロコダイン選手、まるで北方にそびえ立つギルドメイン山脈のように、ずっしり腰を据えて佇んでおります。ああっと!?』

「ブフウウウ」

「ぐわあああああ!!?」

『ロープから跳ね返ってきたポップ選手、口から赤い霧を吹き出しました!』

『どうやら口の中を噛み千切り、血液を霧状に吹き出し目潰しに使ったようですね。血霧、いや毒霧と言ったところでしょうか』

『一転王者がピンチを迎えております。王者、流れを相手にやらぬとばかりにその両腕をポップ選手に振りかざしますが、やはり良く見えてはいないのか、ポップ選手は悠々と避けております』

『私としては熱い肉体のぶつかり合いが見たいところではありますが』

『マァムさんの言う通り、私達としましては、やはりお互いの技を受けきる勝負こそ、魂を揺さぶられるものがあります』

「け、一気に勝負を付けてやるぜ！　土竜昇破拳！」
ボゴォォォ
ポップが両腕をリングに叩き付けると、クロコダインの真下のリングの床が弾け、クロコダインの身体が宙に浮かび上がる。
「な、何い!!?」
ポップ、素早くクロコダインの身体を下に潜り込み相手の両腿を手で掴み、相手の首を自分の肩口で支える。
「う、動けん!?」
この状態で空中に飛び上がり、尻餅をつくように着地しての衝撃で首折り・股裂き・背骨折りを同時に行うという必殺技、五所蹂躙絡み。そして又の名を！
「くらえええ！　キン肉バスター!!!」
「ぐわあああーーーっ!!!」

カーンカーンカーン
『なんとクロコダイン選手破れましたー！　新王者誕生であります！』

『クロコダイン選手は連戦の疲れもあったのでしょう、勝ちを焦りましたね』
『しかしまさか人間の王者が誕生するとは思いませんでしたねマァムさん！』
『はい、ですがあの入場パフォーマンスで観客の心を鷲掴みにした時から何かやってくれるのではとは思っていましたよ』
『なるほど、さすがマァムさんです。リング上では勝者のポップ選手の腕をクロコダイン選手が上げて勝利を讃えております。では今日の中継は新王者誕生となった所で終了となります。実況は私腐った死体と』
『解説のマァムでした』
『では悪魔の目玉の前の皆様、また来週お会いしましょう！それではまた！』

9．ＫＯＰ、スカウトされる

キング　オブ　ポップ。

魔の森へビー級王者として連勝を重ねているポップに観客が付けた異名である。ポップが試合中に技を決め「ポウッ!!」と叫ぶと、観客が一斉に「キングオブポップ！　キングオブポップ！」の大合唱を始めるのである。実に楽しそうな観客たるモンスターや魔族達である。

『この体勢は～!!!』
『これはもう決まりますね』
『キン肉バスター!!!　決まりましたー!!!　キングオブポップ、全魔物未到、Ｖ１２達成～ッ!!!』
「ポウッ！」
『『ＫＯＰ（キングオブポップ）！　ＫＯＰ！』』

『いやーマァムさん、私達は伝説の瞬間に立ち会いましたね！』
『はい、挑戦者ボラボーン選手もなかなかの強者でしたが、凍らせて砕く以外の戦法がないと分かれば後は王者の一方的な戦いとなってしまいましたね。やはりＶ７の時の謎の鎧の魔剣の使い手との戦い、あの激闘を乗り越えた王者の敵ではありませんでした』
『あの試合は後世に語り継がれるであろう名勝負でしたからねー、一体あの鎧の魔剣の使い手はナニンケルさんだったんでしょうか。ではまた来週この時間にお会いしましょう。実況は私、腐った死体と』
『解説はマァムでした』
『『ではまた！』』

ふぅー、今週も大変な戦いだったぜ。あ、どうもポップです。今や魔界で悪魔の目玉視聴率８０％を超える魔の森プロレスで絶対王者をやってます。モンスターや魔族に超人気です。強さこそ全てみたいな魔界で超人気です。謎の鎧の魔剣の使い手（笑）さんからも試合後にサインをくれと言われた事もあります。

実は本当はヒュンナニさんには一つだけ謝らないといけない事がありました。
ここだけの話パプニカに行った時、実は地底魔城に行って魂の貝殻をゲットしてました。将来恩を高く売りつける為に。
ただちょっとした手違いでマトリフ師匠に海鮮鍋作ってる時に一緒に煮込んじゃって、慌てて拾って貝殻耳に当ててみたら「あ……あ……」とか聞こえてきたんで「おっさんの喘ぎ声とか誰得じゃぼけ！」と勢い余って魂の貝殻を叩き割りました。つまりあれですわ。孔明の罠って奴だと思いますわ。「はわわ！」って聞こえた気がするもん。自分の口から発した気もするけど。
……まあ大した問題は無いでしょう。誰にも言わなきゃ良いんだしという結論に至り、笑顔でナニンケルさんにサインを書いてあげました。サイン渡す時に「すまない。ありがとう」と言われたので多分きっと許された模様。やったぜ。

いやー今日もいい試合だったぜーと控え室へ戻ると、今や酒飲み友達となったおっさんことクロコダインとお初にお目にかかるミストバーンとキルバーンさんがいらっしゃいました。帰ってどうぞ。

「やあ、初めまして。僕の名はキル、キルバーンと呼ばれているよ。こっちは使い魔のピ

ロロ、そしてこっちがミスト」
「……」
「は、初めまして！」
「ああ、ピロロは君の大ファンでね。良ければサインを貰えないかな？」
「いいぜ、……ピロロ君へっと」
「わあい！　ありがとうＫＯＰ！」

腹話術ってネタが分かってると見てて面白いなこいつらと思いながらスラスラ色紙にサインを書いて渡すと、ミストバーンが控えめに色紙を差し出してきた。お前もかよ。ああ、こいつ自分で成長出来ないから強者には敬意をみたいな設定あったっけ？つまり俺のファンか。しょうがねえなとミストバーンから出された色紙もサインをスラスラと書いてやったら「……ありがとう」と言われた。「ミストが百年ぶりにしゃべった！」とかピロロが言ってたが、じゃあお前どうやってナニンケルに暗黒闘気教えたんだよと声を大にして言いたい。

「ありがとうＫＯＰ。今日は君に素晴らしい話があるんだ」
「素晴らしい話？」

「おめでとう、君は魔界の大魔王たるバーン様のお眼鏡に適ったようだ。君をスカウトしにきたよ」
「……」

キルバーンが喋りミストバーンが頷く。ポップはマジでこいつら何言ってんのと思ったが、突っ込む前にクロコダインのおっさんが喋り出した。

「俺も声を掛けられてな。俺は行く事にしたぞＫＯＰ。お前もどうだ？」
「いやいやいやいや、いいの？　俺魔族でも無いよ？」
「いや君は完全にこっち側だと魔界じゃ認識されているよ？」

キルバーンの返答に、ポップはそれもそうかと納得する。ポップ、お前それでいいのかよ。まあこれだけどっぷり魔物や魔族とプロレスやってたら致し方なし。

「そっか。まあいいや。よし行こう」
「え？　いいの？　僕が言うのもなんだけど本当に？　何するかも言ってないよ？」
「おっさんも行くならしょうがねえ」

「グワッハッハ！　お前ならそう言うと思ったぞＫＯＰ！」

多少は悩めよお前人間だろとちょっと困惑気味のキルバーンだが肩に乗ってるピロロは嬉しそうなのでこっちが本音だろう。心無しかミストバーンも嬉しそうである。それもそのはず。いまやポップは、キングオブポップは魔界のアイドルと言っても過言では無いのだから。どうしてこうなった。どうしてこうなった。

10．魔王軍、馬鹿を引き入れる。鬼岩城魔改造計画

ミスとんとキルやんに連れられて、鬼岩城（建設中）にやって来た。大規模工事ってテンション上がるよね。

二人にひょいひょい着いて来たら、薄布越しに大魔王バーン様と面接を行う事になった。展開早すぎ。もうちょい細かい描写色々しろと言いたい。

……

……

……

面接は短かった。多分、いや間違いなくめっちゃ怪しまれた。なんでかなー。姿見えてないのに「うるせえ爺」ってつい言ったからかなぁ。その後、「あっいやいや何千年生きてるなら人間から見たら爺だし」って言ったら「……何故人間が余の生年を知ってい

る？」とか言われた。焦って「そ、そりゃあプロレスやってた時に小耳に挟んでさ。あ、あー見た目実はめっちゃ若いとかかな？　あはははははは」って言ったら全員黙り込んでやんの。無事誤魔化せたね。ふっ、勇者アバンの使徒にして大魔道士マトリフと拳聖ブロキーナの弟子は伊達じゃない事を口車でも証明してしまったぜ。

まぁなんやかんの問答した結果、「余の下ではたら「よっしゃ！　仕方ないなあ好き放題やるでえ！」……ああそう頑張って」みたいな感じでお許しを頂きました。いやー熟考だったわ。悩んだ悩んだ。これで俺も魔王軍入りだわ。立場は後で決めるってさ。

さっそく、「鬼岩城の設計図見せてー」と頼んだら現場監督やってるオークさんのとこに案内された。んで設計図見せて貰ったんだけど。物足りない。せっかくデカイのに。デカイだけやんけ。つまらん。しょうがねえなと現場監督連れて設計図持ってザボエラの爺の居場所を聞き出してザボエラの研究室に乗り込んだ。これでもかと言わんばかりの怪しい施設にテンション上がってきた。「人間……？　ああ、ＫＯＰか」と割りとすんなり皆受け入れてくれる現実に笑えるね。サインくれとも良く言われるよ。で、ザボエラの爺に設計図広げて熱く語る訳よ。

まず、外装岩のままとかダサいからパージ機能着けよう。こいつはクロガネの城になるんだ、スーパーロボットなんだ、コックピットは脳の位置にあるべきなんだと。

ロケットパンチは男のロマンなんだと、外部装置としてジェットスクランダーを用意して空を飛ぶべきだと、やはり光子力ビームやブレストファイヤーを搭載すべきだと。

は？　動力？　そんなもん爆弾岩でも積めてドッカンドッカンさせとけよ。メガンテエネルギーだよ。この巨体に搭載する浮かす設備どうすんだって？　大丈夫だよベタンの術式をあんたが研究すれば反重力だって出来るって。そんな必殺技どうやって武装するのかって？　大丈夫だよ魔法力を蓄積する技術（ようはあんたのマホプラスと実はアバン先生から一発パクった魔弾銃の弾）を研究すればメラゾーマ１０００発分くらい貯めるって。んでそれをぶっ放そう。イケるって。大丈夫だって。あんたの超頭脳ならイケるって。よ、天才！　あ、そうそうオリハルコンの剣持った奴が襲ってくる想定で真っ二つにされてもすぐにくっついて再生出来る仕様にしよう。はあ？　無理？　どうせ超魔生物とか研究してんだろ。それなんとか応用してよ。何故知ってるって？　そそそそれはあれだよ。勘だよ勘。細かい事気にすんなって！　俺とザボエラの仲じゃない。え？　初対面？　一度会ったら友達で毎日会ったら兄弟らしいからへーきへーき。よし、さっそくやろうぜ！

とまあ素晴らしいプレゼン能力を発揮し、マジンガー鬼岩城の開発が始まった。バーン様に許可取りに行ったら、なんか呆れてた気がする。

このマジンガー鬼岩城が量産された暁には人間なぞあっという間に叩いてくれる。

フハハハハハハハ！

とりあえず初日はそういう事になった。

11．エイミ、拉致られる

「おじいちゃんの作ったマジンガーは無敵なんだ！」
「うるさい！　いいから手伝わんか！」
「いやいやいやいや、作ってもらうからこそ価値があるんやで」
「お前がめちゃくちゃ言うから忙しくなったんじゃろうが！　いいから手伝え！」

最近、ザボエラおじいちゃんとイチャイチャしてるのが1日の大体の過ごし方となってますポップです。まあ、それはいいんだけどこっちに来て最初にぶち当たった壁があったんだよね。

食事。マジでまずいわ。人間の舌に合うように作れよ。後、まだ人間辞めてないから俺に出しちゃいけない肉出すな。本気でしばいといたけど。まったくヒュンケル良くこんなとこで生きていけるわと考え、そういやヒュンケルどうしてんだろと思いピョコピョコヒュンケルの元へ顔を出した。めっちゃ修行してた。でも空気読まず邪魔する事にした。

「ようヒュンケル」
「ポップか……。魔の森以来だな」
「ああ、俺も魔王軍入りしたんで宜しくな」
「フッ……」

相変わらず格好つけたニヒルな笑いをする奴だぜ。死ね。じゃなかった聞きたい事あるんだった。

「なあヒュンケルよ、ここ飯まずくない？」
「……慣れた」
「マジかよ。慣れんなよ。改良しろよ」
「……郷に入れば郷に従えと言うだろう」
「いやいやいやいや、人間考えるの辞めたら終わりだよ？　思考の放棄は駄目だって。こんなクソまずいもん食べてやってられないって。なんとかしようぜ」
「……俺は別に今のままで構わん」

ヒュンケルはそう言うと再び剣を握り修行を再開した。こいつに言っても無駄だっ

た。しょうがない。人間の料理人を連れてこよう。チョロそうな奴にしよう。そう考えパプニカへルーラで飛んで行った。

パプニカの街中をうろうろしていると、チョロい賢者……じゃなかったパプニカ三賢者の一人であるエイミを見つけた。さっそくヒュンケルにモシャスして近づいたら、なんか顔赤らめてやんの。

「な、何かしら」

「……俺の名はヒュンケル」

「な!?　貴方が姉さんを困らせてる!?」

「それは誤解なんだ。いや、それはもうどうでもいい。貴女の名前を教えて欲しい」

「わ、私?　エイミだけど……」

「エイミ!」

ガッと勢いに任せエイミの両肩を掴む。ぐっと顔を近付けてもこいつ拒絶しないでやんの。これがイケメンの力か。あいつ死なねえかな。

「俺に毎日料理を作ってくれないか!」

「え……いきなりそんか事言われても……私も立場や仕事が……」

なんだかんだ言いながらも離れようとはしないエイミ。イケる。こいつエロゲのヒ

ロインよりチョロインだぞ。
「君にも立場があるのは分かった。だが、そんなの関係無い！　俺は君が欲しいんだ！」
「は、はい……」
「よし、ルーラ」

「え……えええ～!!!」

こうしてパプニカ三賢者改め魔王軍料理長エイミが誕生した。ヒュンケルも飯が美味くなってなんとなく嬉しそうだった。二人の仲を取り持つなんて、俺の口車があれば余裕なんやで。と言うわけで二人は割りと良い仲になった。そして二人の夜の秘め事はザボエラと作ったミニ悪魔の目玉でバッチリ録画した。

１２．エネルギー岩石生命体の禁呪法にあるものを混ぜてみた

仕事の出来るエリートヘッドハンティングマンであるポップはパプニカ王国へ三賢者を引き抜いた事のアフターフォローを決して忘れない。

”エイミは頂いた。年増のマリンはいりません。　ｂｙヒュンケル”

と書いた手紙と共にミニ悪魔の目玉に録画した動画を同封して送っておいた。ちゃんと良い子は見ちゃ駄目だよって書いたから大丈夫だろう。これでヒュンケルの股間の鎧（笑）の魔剣も王族へ大公開されたね。気になって後日、一応姫の家庭教師してたからパプニカ王城へひょいっと顔を出したら、マリンが暗黒闘気に目覚めて体から日常的に駄々漏れしてた。草生えるわマジで。

もう三賢者じゃなくて二賢者だねってプークスクスと笑いながら言ったら、なんか城で会議が行われたらしく臨時で俺が三賢者（仮）になった。なんでや。パプニカから出せや。この国の人間じゃないぞ俺。まあ週一で顔を出せばいいからとか、仕事は姫に魔

法を教えるだけでいいけどたまにマリンの暴走を止めてとか、給金は弾むとか言われたから仕方なく引き受けた。これで俺はアバンの使徒にしてマトリフとブロキーナの弟子であり魔の森ヘビー級Ｖ１２王者のＫＯＰでありながら魔王軍幹部（候補）にしてパプニカ三賢者（仮）となった。なんだこれ。肩書き多すぎ。

週一か。魔の森も週一で行ってプロレスやんなくちゃいけないからなあ面倒臭い。実はロモスにも月一で行かなくちゃいけないんだよなあ。偽勇者一行を意味もなくしばき倒して、月に一回上納金を納めさせてるから。バーン様にパプニカ王国の重鎮になったから週一で顔を出す事になったって報告したら、薄布越しだけど「何言ってんだコイツ……」みたいな空気をバシバシ感じました。正直、言ってる俺も何言ってるかよく分かってなかったのでセーフだと思います。

偽勇者達がやっと儲け話見つけてきて、モンスター島にゴールデンメタルスライムって奴がいて捕まえてきたらロモス王から沢山金貰えるはずだから上納金ちょっとだけ待ってくれとか言ってきた。

ん？　それ読み切りの奴やんけ。原作始まるの？　マジで？　まあいいや。上納金びた一文まけないからさっさと宜しくと言っといたから多分急いでデルムリン島に行くだろう。俺？　無視だよそんなイベント。面倒臭いわ。

そんな事より最近のマイブームはハナタレ魔王ことハドラー様で遊ぶ事ですわ。なんか禁呪法でエネルギー岩石生命体を作るとか言ってたので今日は隅っこで見学してます。絶対に邪魔するなよと何度も何度も念を押されました。そんなに言われると、ちゃんと空気読むよ俺。儀式をじーっと見守っていると、何かに気付いたハドラー様が俺に声を掛けてきた。

「……おいポップ。貴様あの魔法陣の隅に置かれている魔法書を知っているか」
「ん？　あーあれ？　パルプンテの書だけど？」
「な、なんだと!?」
「いやー混ぜたら面白いかなーと思って」
「き、貴様……もう術式は展開されておるというのになんて事を」
「いいからいいからーテリーを信じてー」
「テリーとは誰だ！　くそ、出ていけと言っても出ていかないと思ったらこいつは……！」

なんかハドラー様がすごい文句言ってる。でも文句言ってるだけなのは、一度ハド

ラー様しばいたからだね。正直、初期ハドラー様なんて今の俺でも余裕なんだよなあ。

「く、今さら止められん……！」

「お、魔法陣からピカーと光が出だした」

「ちぃ、成功してくれ……よ……」

「「あっ」」

　ボフっと魔法陣から煙幕と共に、一人の女の子が現れた。どうやらパルプンテの書のおかげでバグったらしい。どうみてもブラックロックシューターな外見をしている。エネルギー岩石生命体……だ、大体合ってるんじゃないかな？　片目炎だし。炎だけど青いし。ロックだし。名前はフレイザードになったけど、お前が責任持って面倒見ろと押し付けられた。責任取れって……嫁にしろって事かな？

13．フレイザードちゃん

「勝てば良かろうなのだー！　はい復唱！」
「か、勝てば良かろうなのだー」
「よし、次だな。大魔王からは逃げられない！　はい！」
「私魔王じゃないよ……？」
「細かい事を気にするなって言ってるだろう？　はい！」
「う、うん……大魔王からは逃げられない……」

フレイザードちゃんの面倒を任された俺は、フレイザードちゃんの特訓をしていた。今やっているのは悪役らしい台詞を言う特訓である。何故こんな事をしているかと言えば、この娘は素直でまっすぐな性格でありフレイザード感ゼロなのである。もっと狡猾で汚い性格に育てなければいけない。でもめっちゃ可愛いから強くなって負けないで欲しいのでクロコダインやヒュンケルに修行をつけてやってくれと頼み込んで、二人と戦ったりザボエラと一緒に魔法を教えたりしている。アバン流だって武神流だってマトリフのオリジナルだってばっちり教えている。

でもそれが間違いだった。ひたむきにまっすぐ強く成長しているフレイザードちゃんは、クロコダインやヒュンケルのような武人に憧れてしまっている。このままではいけない、残忍さの欠片もないとかどうなってんだよとついため息をついてしまう。俺がため息を吐くと焦ったようにフレイザードちゃんが言う。

「お父様、ごっごめんなさい。あの、ちゃんと……ちゃんとやるから嫌わないで……見捨てないで……」

なんか勘違いをした悲しそうな、哀願するようなフレイザードちゃん。生まれてすぐハドラーに捨てられたと思っているフレイザードちゃんは泣きそうになっていた。たまにこう負のスイッチがトラウマで入っちゃうんだよなあ。

ふむ。フレイザードちゃんの頭をポンポン撫でながら少し考えて、この娘の世界観を広げる事にした。

「よし、パプニカに行こう」

「はい……？」

パプニカ王城にフレイザードちゃんを連れてきた。門番で「どなたですか？」って聞かれたから「俺の娘」と答えたらなんか変な顔をされた。「なんか片目燃えてますよね？」とか怪しまれたけど「そんな事言ったらマリンなんか暗黒闘気駄々漏れやん」って言ったらそれもそうかと納得してくれた。マリンの事を言えば納得するパプニカの人々。チョロい。そんなこんなでレオナ姫の私室までやってきた。

「娘って……。ポップと同い年くらいに見えるけど？」

レオナの言う事ももっともだと実はポップも思ってる。というかまだ生まれたてだからなフレイザードちゃん。むしろここまであの言い訳で通したパプニカ側に問題があるぜとポップは思っていたが、パプニカ側からすればまたポップがなんかやってるくらいにしか思っていない。パプニカ側からのポップには妙な信頼があった。

「レオナ姫……、見た目で人を判断しちゃ王族なんてやっていけないぞ？」

「ええ……私が悪いっていうの？」

「あ、あの……すいません……」

「ああ、いいのよ。ごめんなさいね？　どうせポップに無茶言われてるんでしょう？　まったく、こんな良い娘無理矢理連れ回すなんて」

「無理矢理じゃないです！　お父様は私の為を思って行動なさってくれています！　お父様は！」
「え……ああ、そう……そうなのポップ？」
「えっ……アアウンソウダヨ」
「ま、大体分かったわ。身寄りの無い娘を引き取ったって訳ね。それにしても片目から魔力が漏れ出てしまうなんて……。ここじゃなければ怖がられてしまうかも知れないわね」
　仕方ないわねと言った感じのレオナ。ここにはマリンとかいうおかしな前例がいるからね。
「そんな事ありません。いままでだってお父様が皆様に紹介なさってくれたおかげで皆（思いっきり同情して）可愛いがってくれています」
「へえ？　良いところあるじゃないポップ」
「ダロー、オレイイヤツダロー」
「ねえ、フレイザードちゃん。私とお友達になりましょう？」
「で、でも私……お城の作法なんて知らないし……」
「大丈夫よ、ポップなんて無礼不作法この上無いけど普通に城の中を勝手に徘徊してるくらいよ？　礼儀作法とか知りたいなら教えてあげるわ。でも堅苦しいだけよ？」

「で、でも……私で良いんですか？　あの……私、その……ごめんなさい。優しくして頂いてほんとに嬉しいです。でも駄目です。私、……人間じゃないんです。魔族なんです。だから……迷惑かけちゃいます」

　そういうとフレイザードちゃんは下を向いて自分の服を両手でぎゅっと握りしめてしまった。人と魔族。この壁を正しくフレイザードちゃんは認識していた。まして相手は王族である。自分の存在が相手に迷惑をかける事が嫌だった。そして、優しくしてくれた相手に嘘をついて嫌われる事が嫌だったのだ。とてもポップが面倒見てるとは思えないまっすぐな娘だね。

「関係ないわ。仲良くしましょ？」
「え、でっでも……」
「うちなら大丈夫よ。（正直いまならマリンのほうがよっぽど魔族っぽいし）……まあそれにポップが連れてきたんなら大丈夫だと思うし。ね？」
「ソウダゾーダイジョウブダゾー」
「あ、あの……じゃあ……その……お願いします、レオナ姫」
「レオナでいいわ、宜しくね」

「はい！　レオナ！」
「あーもうほんと可愛いね」
元気良く返事をしたフレイザードちゃんに抱きつくレオナ。わたわた慌ててるフレイザードちゃんまじ可愛い。こうして王族のレオナ姫に魔族の、フレイザードちゃんに人間の姫の友達が出来た。
フレイザードちゃんはとても嬉しそうにポップに感謝の言葉を言う。友達が出来た事がとても嬉しそうだった。
人間は魔族なんて冷たくあしらうんだぞー、だから心も身体も強くならなくちゃいけないんだぞーという実体験を積ませようと思って連れて来たポップの計算は完全に間違っていた。

１４．ｖｓ竜の騎士バラン　ポップの本音

フレイザードちゃんまじ天才。ヒュンケルと修行しているだけで見よう見まねで海破斬と大地斬を覚えた。クロコダインの獣王痛恨撃も覚えてた。なにこの娘。そしてこの前、嬉しそうにオリジナル呪文作ったとか言ってフィンガーフレアボムズをぶっ放した。まあそれに関しては禁呪なんて編み出してフレイザードちゃんの寿命縮んだらどうすんだ！ってめっちゃ怒った。使用禁止って言ったら泣きながら謝られたので頭ポンポン撫でて慰めた。

このまま成長すればフレイザードちゃんは物凄く強くなる気がする。しかし足りない。実はミストやヒュンケルに闘気の使い方も教えてと頼んだんだけどこの娘、暗黒闘気の素養がまったく無いらしい。つまりこの娘の素養は光。ヒュンケルも現状暗黒闘気のみだし、俺も闘気は使えない。クロコダインも技は闘気系かも知れないけど基本力業だからなあ。ダイと戦うのであれば対竜の騎士、というか対ドラゴニックオーラの対策が必要である。やっぱり闘気は必要だと思う。

やだよ俺。この娘がアバンストラッシュで真っ二つにされるとか。無理矢理拉致られたようなこんな世界ほんとどうでもいいし、めちゃくちゃ荒らして適当に遊んで笑っ

てやろうと思ってたし、その通りいままで過ごして来たんだけどそれだけは駄目だね。魔界にこの娘連れてって静かに暮らそうかなーとか思ったけど、この娘の生まれ的になあ。ハドラーが禁呪で作り出したこの娘、場所とかすぐばれそう。それに例えばダイ側に寝返って勝つとしよう。前大戦の大功労者であるマトリフですら一度城に迎えられるもいじめられて追い出された。いくらレオナ姫と仲良くても人間でもないフレイザードちゃんはどうなる？　始めはいいかも知れないが何れは……

この娘が死ぬ。不幸になる。それだけはさせない。

つー訳で、バランの所に来て頭下げてフレイザードちゃんに闘気の使い方を教えて欲しいと今現在めっちゃ頼み込んでいる次第であります。頭下げまくって頼んでます。横でフレイザードちゃんがあたふたしてます。

「頼む、この通りだ。この娘に闘気の使い方を、闘い方を教えてくれないか」

「あ、あの、お父様!?」

「……何故私がそのような事をせねばならん」

確かに。じゃなかったお前こんだけ頼んでも何も思わないとか鬼か、この人でなし。

あ、人じゃなかった竜の騎士とかいう種族だった。
「この娘を強くしたい！　その為にあんたの力が必要だ。俺じゃ足りない」
「そんな……お父様！」
「ふん……」
　くっ、どっか行きそうなバランの気配を感じて速攻で頭を下げるスタイルからジャパニーズ土下座スタイルに移行した。
「この通りだ！」
「……誇りが無いのかお前は」
「お父様！　顔を上げて下さい！　あ、あの私が弱いのであれば頑張って強くなりますから！　その……お父様はお強いです！　そこまでしてバランに頼まなくても私にはお父様がいます！」
「……」
　なんと言われようがジャパニーズ土下座スタイルを崩さない俺。土下座で駄目なら……土下寝する？　いや逆に馬鹿にしてんのかって言われそう。普段ならそこまでやって馬鹿にするけど、今やることじゃない。
「……分かった。ただし、条件がある」
「条件？」

「私と戦い、私が貴様を認める事だ」
認める事？　まあ竜の騎士相手に勝つのは無理だろうから妥当なのかこれは。いやいやいやでも無理あるだろ対バランは。四角いリングで呪文とドラゴニックオーラ禁止ならやれると思うけどさー。むー、いやしかし……
「お父様がバランに勝つに決まってます！」
そうだな。俺は勝つよな娘よ。闘ってる所なんて見せた事ないけどな。なんなんその絶大な信頼感。裏切りたくないよこの娘は。という訳でこの世界来て初めてのプロレス以外のガチバトルを対バランで行う事になった。筆下ろしの相手豪華過ぎると思うんですが。

闘技場に移動した。何故か話を聞きつけた将来の軍団長達が観客席にいる。あと工事現場で酒盛りしてワイワイ仲良くやっているモンスター達が応援に来ている。という事はもちろんこれバーン様も見てるんだろうなあ。まあ相手が相手だし、手の内隠すような真似は出来ないけどさ。
「さあ、いくぜバラン！」

「いつでもこい！」

ポップは一瞬で自身の廻りに数百と言える膨大な数のイオラの光球を出現させた。まず、この時点で観客の大半が度肝を抜かれた。あいつ攻撃魔法使えたのかよと。レスラーだけじゃないのかよと。

そして魔法を使えるものはポップの技量に驚いた。数百と言える光球を出現させた。一発を放つのでは無い。己の意志で光球の動きを、しかも夥しい数の一つ一つがイオラクラスの威力を持つ光球を同時に制御しているのだ。

「化け物か奴は」

誰かがそう呟いた。ハナタレ魔王は「むう……」とか言いながら顔から汗が流れる。しかし、ポップ自身はこの光球がバランに通じるなどとは微塵も思っていない。イオラごときでドラゴニックオーラを突き破れるはずなどないと確信していた。単なる目眩ましの為、光球を出したのだ。幾つかの光球が爆発する。粉塵が舞い、視界が閉ざされた空間でバランは気配を探っていた。突如背後から現れたポップがバランの身体を掴む。そのままキン肉バスターに移行しようとしたがバランがドラゴニックオーラを全身から発生させ、ポップを引き剥がした。ポップは後退しながら数十の光球をバランにぶつけるも無傷を確信しているポップは新たに魔法力を片手に溜め、イオラで起こった

爆煙に向けベギラマを放つ。しかしポップの放った閃熱は爆煙の中から飛び出してきた竜の紋章形の閃光が切り裂き、逆にポップの拳を焼いた。
「ぐう……紋章閃か……やっぱドラゴニックオーラって反則だろ！」
痛めた拳を見ながら心の中で思いっきり文句を言うも、爆煙が晴れ現れたバランには、紋章の焼け跡を見せながら軽口を叩く。
「ほら、紋章お揃いだぜ」
「ほう。その程度で済むか」
「お父様、すごい！」
フレイザードちゃんが叫ぶ。観客となっていた将来の軍団長達もポップの実力に驚いていた。ルーラとモシャスが使える力業を得意とする男だと思っていたら、蓋を開ければ神業的魔道士だったのだから当然といえば当然だが。
「ライデイン！」
「ちっ」
ポップはトベルーラで空中を高速飛行し雷撃を避ける。ライデインを連続で放ち手

を緩めないバランに対し、飛行しながら指先に極限まで集中し貫通力を高めたギラを連続で放つ。バランはそれを軽く避ける。そう、避けたのだ。
「避けたって事は、あれは当たれば多少なり効くって事だよな」
そう確信したポップは覚悟を決めた。一撃を貰う覚悟である。マトリフから爆撃や閃熱を幾度も喰らった身体である。たとえ雷撃であろうと、一撃で墜ちるとは思わなかった。
「ライデイン!」
「お父様!」
雷撃が直撃し、フレイザードちゃんが悲鳴を上げる。しかし直後、全員が驚愕した。
「あれは……人間があれを使うだと!?」
ハドラーが声を上げた。原時点ではハドラーでも使えぬ呪文。オリジナルで編み出された呪文と竜の騎士の呪文を除けば、この世界最強の呪文。多少溜めが必要だったこの呪文の溜めの時間を、ライデインを受けるという荒業で作り出した。
「くらえ、ベギラゴン!!」
「くっ」
ポップの両腕から放たれた極大閃熱呪文による閃熱を、バランは間一髪空中に逃げる。放たれた閃熱が闘技場の一部を破壊する。

しかし、極大閃熱呪文はおとりであった。
「ルーラ!」
「な!?」
目的地に高速で飛んでいくこの呪文の加速力を、バランに一直線に向けた。目的地をイメージして飛ぶ呪文である。ならば目標を目の前の相手に向ければいいというこの世界の人間がしなかった発想でポップはバランに突っ込んだ。
「猛虎破砕拳!!」
「がぁ!?」
高速の突進力を上乗せした必殺の拳は、ドラゴニックオーラを破りバランの腹に叩き込まれた。さしものバランも吹き飛ばされ観客席に衝突した。
「お父様やった!」
フレイザードちゃんの歓声とは裏腹に、ポップは内心で舌打ちをした。手応えがあまり無かったのだ。恐らくわざと吹き飛び、威力はほぼ殺された。衝突のダメージはドラゴニックオーラで殺されたであろう。闘いの天才である竜の騎士相手に、奇襲に奇襲を重ねてここまで五分に見せてはいるが、ポップには圧倒的に実戦経験がない。力量も経験も不足している事を痛感した。
ポップの正直な所で言えば、竜の騎士やバーンなどの強者相手に闘うなどもってのほ

かであり、相手が強者であればなんとか逃げるだけの力があればいいと思っていたし、地上が消えるのであればそのタイミングで魔界にいるか、バーンパレスにいればいいとしか思っていなかった男である。力を出し策を練り戦ってはみたものの、やはりどう考えても勝ち筋が見えない。観客で応援してくれるフレイザードちゃんがいなかったら戦ってすらいない相手が立ち上がってくるのを見ながら、もう賭けに出るしかないなとポップは思った。

「認めようポップ、貴様は強い」

真魔剛竜剣の柄をバランが握った。代々の竜の騎士が受け継いでいる武器、正当な竜の騎士である事の証。ロン・ベルクが百年以上追い求めた究極の武器で、神が作ったといわれる地上最強の剣。正直勘弁して下さいと言いたいが、ポップの予想は最悪の方向に当たる。

落雷が真魔剛竜剣に落ちる。お前それは駄目だろう。クロコダインのおっさんがベホマ掛けてギリギリ死ななかった、それ以前に耐えた者はいなかったとか言ってたくらいだから多分ヴェルザーも耐えられなかった技。

「受けてみろ！　我が最強の剣を！　ギガブレイク!!!」
「くそったれ！」

一瞬で間合いを詰めたバランが必殺剣をポップに放った。

そして激しい金属音が会場中に響いた。

「な、なんだとぉ!!?」

バランが驚愕する。ポップはバグモシャスを使った。下手をすれば負け確定の大博打である。そしてここまで激しく魔法力を消耗していたポップの手札が、一か八か、残る手が現状これしかなかったのである。そして賭けに勝った。残り少ない魔法力で変化したのは腕だけだった。しかしその両腕は、黄金聖闘士である魚座のアフロディーテの腕。そしてそれは神話の時代より傷すら付かなかった（正直聖戦の度に傷付いてる気はする）最強の黄金の聖衣を纏いし腕。更にポップ自身の体躯はクロコダインとでも単純な力比べで負けない体躯である。両の腕を交差し黄金の聖衣で一撃を受けながら、その両脚で踏ん張り見事に受ききってみせた。

『そこまでだ』

突如、悪魔の目玉を介し大魔王の声が闘技場に響き渡る。

『両者見事であった。双方剣を納めよ。人間界侵攻を前にどちらかを失う訳にはいかん。後で褒美を取らす』

よく言うぜ。魔王軍なんて遊びの駒程度にしか思ってないくせに、大体俺剣じゃねえよとポップは思ったが、これ以上戦闘が続かなくて助かったというほうがポップにとって大きかった。竜魔人にすらなっていない状態で博打を打って、外部の助けで引き分け。自身の現実を痛感させられた。

「ふっ」

真魔剛竜剣を鞘に納めたバランはポップに手を差し出した。

「我がギガブレイクを良く受け止めた」

「正直まぐれなんだけどな」

「ポップ、貴様の望み聞いてやる。我が友の望みをな」

「そりゃ……助かるぜ」

バランと握手を交わし観客席で声援を送ってくれたフレイザードちゃんに手を振り、フレイザードちゃんの笑顔を見て安心したポップは力尽き、その意識を手放した。

15．ダイの大冒険、始まらない

「ゴールデンメタルスライムのゴメちゃんって言うんだ！」
「そっか、宜しくねゴメちゃん！」
「ピィ～ッ！」

バランと二人で我が子供達の交流を見守ってます。ポップです。
折角バランと仲良くなれたので、バランに「その紋章と同じ紋章を持つ子供を見た事がある」と言って、バランをデルムリン島に連れていった。ダイ君確保完了である。ダイの大冒険終わった。バランから感謝されたが、一つだけ言わせて欲しい。うちの娘は嫁にやらないからな。
ゴメちゃんという神の涙、なんとか悪用出来ないだろうかという下衆な考えは、フレイザードちゃんがゴメちゃんと遊んでいる様子を見て諦めるしか無い模様。
フレイザードちゃんとダイ君はお互いすごく素直で、すぐに仲良くなりいまや完全に魔王軍の清涼剤である。まじ癒される。そしてバーン様からバランとの戦いと竜の騎士二人目確保という功績を凄く誉められた。ハドラーじゃなくて俺が魔軍司令になる

模様。ハドラー、グレるんじゃね？　いやまあ良く考えたら俺、ハドラー以外軍団長達全員仲良くやってるな。じゃあ問題無いか。

フレイザードちゃんがバランに修行を付けてもらい始め、すげえ成長してるのが端から見ても良く分かる。めっちゃレベルアップしてる。試しに俺自身まだ使えないが、概要だけこんな構想の魔法があると伝えるとメドローア覚えちゃった。覚えた後、誉めて誉めてーと笑顔で伝えてきたフレイザードちゃんに無いはずの尻尾が千切れんばかりに振り振りしてるのがなんとなく見えました。ダイ君もバランに修行付けてもらい始めたけど、こっちはとりあえず自在に竜の紋章を使う所からみたいだった。もう、人間側勝ち目無いんじゃないかな。まあダイ君が人間滅ぼす為に戦うなんて思わないけど。

それにしてもうちの娘なんでもありやね。もう俺いらないかなーとかうっかり言ったら泣きながら怒り出して大変だった。この娘の為なら死ねるけど、俺死んだらこの娘も死にかねないから死ねないなこれは。でも敵となる人間側に強敵ほとんどいない気がするから……とか言ってるとなんかのフラグが立ちそうだから言わない。

まあ近況はそんな感じで、今日はザボエラおじいちゃんと二人でお茶してます。

「フレイザードが闘気を覚えたじゃと？」

「そうなんだよ、やっぱうちの娘天才っていうか……天才？」

「ふむ、妙じゃな」
「何が？」
「いやいや、まだわからんがの。こんどフレイザードちゃんにお茶しに来いとわしが言ってたと伝えてくれ。それはそうとこれ、作っておいたぞ」
「おー伝えとくわ。……お、出来たんだ小型魔法の筒二種共」
「きっしっし。青いほうが魔法を込めるほうで赤いほうが魔物を連れていけるほうじゃ。あの魔弾銃の弾とやらは参考になったわい。で？　どんな悪用をするんじゃ？」
「そうだなー。爆弾岩入れて、人間に飲ませてからデルパやったら体内から爆散する人間完成とか？」
「……えげつない事考えるとのう。人間のほうがよっぽど悪知恵が働くわい」
「いやいや、魔族や魔物ばらして生物実験やってるおじいちゃんのほうがよっぽどえげつないわ」
「あっはっはっはっは」
「さーてと、フレイザードちゃんには伝えとくけど、あの娘になんかしたら怒るからね」
「おー怖い怖い。心配せんでも良い。……あの娘には感謝しとるからの」
「ん？　なんかあったの？」
「この前、人間界で作ったとかいうスコーンを持ってきての。……ザムザを連れてな」

「ああそういう事か。な？　うちの娘めっちゃ良い娘だろ？　あ、ザムザの嫁にはやらないからな。にしてもおじいちゃんまだ家族思う心があったのか。驚きだね」
「お前には言われとうないわい。……お前が育てて何故あそこまで素直な娘に育っておるのか、ほんと不思議じゃの」
「そりゃ俺自慢のフレイザードちゃんだからな！」

16．フレイザードちゃんの日記

×月□×日

今日、私は作られました。生まれてすぐに棄てられました。なんだこれはって、失敗作だって言われました。作ったハドラー様……ハドラーにそんな事を言われて名だけ与えられた後にポップお父様に引き取られました。うなだれていた私にお父様はポンっと頭に手を乗せて、「宜しくな」って言ってくれました。私はお父様の手が好きです。今思えば、名前もお父様から頂きたかったです。

×月×□日

お父様が私を色んな魔族や魔物達に紹介してくれました。クロコダインはとっても大きくて優しいです。ヒュンケルは強くてエイミとらぶらぶらしいです。ザボエラおじいちゃんは始めは怖かったけど、お父様が話をしてくれたら普通にお話出来るようになりました。私が特殊だから興味を持ってるらしいです。あと、建設現場の魔物達も紹介してくれました。皆、良い魔物でした。お父様はよく皆と飲み会をしているらしいです。お父様は仲が良い種族がたくさんいます。

○月□△日

私達、魔王軍は人間を滅ぼす準備をしているそうです。お父様やヒュンケル、エイミは人間です。でも魔王軍です。なんで？　ってお父様に聞いたら、人間同士だって魔族同士だって、魔物同士だって殺し合うなんて珍しくないんだよ。別の種族だったら尚更なんだよって言われました。皆で仲良く出来ないの？　って聞いたらそうなれたら良いんだけどねって言われました。

○月□□日

パプニカという人間の国にお父様が連れてきてくれました。パプニカのお姫様のレオナと友達になりました。友達。初めての友達です。人間なのに、私と友達になってと言ってくれました。お父様はこの国のお偉いさんになるそうです。でも人間を滅ぼす魔王軍の人間です。お父様に、パプニカも滅ぼすの？　って聞いたら、そうなるかもなって言われました。マリンという人間は怖かったけど、他の人間は良い人間が多かったと思いました。でもお父様が悪い人間に会わせなかっただけだと後で気付きました。私を見る目が怖い人もたくさんいました。優しい人間だけじゃないんだって分かりました。

○月□×日

お父様に強くなってほしいと言われました。お父様が言うなら私は強くなりたいです。お父様に必要にされたみたいで嬉しかったです。クロコダインやヒュンケルに試合してもらったり、お父様やザボエラおじいちゃんに魔法を教えてもらう事になりました。暗黒闘気は私は使えないみたいです。修行……お父様だけでいいのにな。

○月×
×日

修行中、ある事に気付きました。お父様に言うと危ない事しちゃ駄目って怒られそうなのでザボエラおじいちゃんに頼んで魔法耐性をこっそり調べました。全ての魔法が私にとって効果がほとんどないようです。でも私は魔法がちゃんと使えます。ザボエラおじいちゃんはとても興奮していました。お父様がいなければ解体していたかも知れないと言われました。お父様……ザボエラおじいちゃんに何かしたのかな。あと、お父様が何かを思い付いたようで魔王軍の人達にもこっそりとある事を始めました。私は聞いた時驚きましたが、どう考えても私の為のようでした。お父様が私の為に泥を被ろうとしています。私も手伝いたいと言いましたが許してもらえませんでした。

○月×△日
お父様がある魔法の書を無くしたと言っていました。もしかしたらパルプンテの書と一緒に私の中に入ったかも知れないと言っていました。試しに森でその魔法を使ったら、使えました。お父様は冷や汗を流しながら「内緒な」って言ってました。お父様が言うなら私は誰にも言いません。

○月×♪日
お父様に憧れてオリジナル呪文を作りました。お父様に見せたら凄く怒られました。寿命を削る可能性がある呪文だったようです。怒られて悲しかったけど、心配してくれてとても嬉しかったです。やっぱりお父様は優しいです。

○月×□日
お父様がバランに頭を下げて私に闘気の使い方を教えてほしいと言ってました。私はそんなにお父様から見て頼りないんでしょうか。悲しくなりました。私はお父様の為ならなんだってします。お父様はバランより強いって言っちゃいました。多分、私のせいでお父様はバランと戦う事になりました。そしてお父様はほんとに強かった、凄かったです。一緒に見てた皆も驚いていました。結果は引き分けでしたが、凄くカッコ

良かったです。試合後、お父様に悲しそうな顔で「ごめんな、勝てなかったよ」って言われました。……お父様にこんな顔をさせたのは私です。私はお父様の為に強くなります。

○月♪♪日

バランの息子のダイ君と友達になりました。明るくて、元気でとても良い子です。バランとの修行も始まりました。お父様が頼んでくれた修行です。頑張って闘気をちょっとですが使えるようになりました。あとお父様が言っていたメドローア、なんとか使えるようになりました。誉めてもらえてとても嬉しかったです。でもその後にお父様が悲しい事を言いました。お父様に棄てられるかも知れない恐怖で泣いてしまいました。そしてお父様と一緒じゃないとやだってワガママを言いました。お父様に必要とされなくなるのが怖いです。

♪月□日

ザボエラおじいちゃんとお茶をしました。この中で、私が闘気を使える事についての話がありました。……多分私の作られた過程での事故が原因です。ザボエラおじいちゃんに聞いてはっきり分かりました。禁呪法という邪法に、ミナカトールという破邪

の呪文という相反するような魔法の書。水と油。それを奇跡の呪文パルプンテの書で結びつけたのが私なのだとその時認識しました。もちろん私の中だけの秘密です。私はエネルギー岩石生命体でも、魔族でも人間でもありません。ザボエラおじいちゃんは無理矢理分けるなら???系だと言ってました。私は禁呪法で作られたはずなのですが、全く枠外の生命体らしいです。私の命は、恐らくハドラーではなくお父様と結びついているようだと教えてくれました。魂の色が限りなく人に近しいとの事です。これはお父様にも内緒です。私の命はお父様と共に。

17．対人間会議

軍団長達が集められました。これから会議するそうです。俺は二日酔いなので真面目に聞くふりをして腕を組み目を瞑って頭痛に耐えてます。フレイザードちゃんも真面目な顔付きで目を閉じてます。眠いのかな？　さすがにダイ君はいません。進行役はおじいちゃんです。

「我らが魔界や魔物は強き者に従うという不文律があるが、人間はどうも違うようじゃ。力を持つ者は恐れられ虐げられるというからの」

「……。」

バランが一瞬反応したが黙ってるな。魔女裁判掛けられた張本人だもんな。

「恐ろしきは人間よ。力ではない。敵に特攻し自己犠牲呪文を使う部隊、人が足りないのであれば女子供に竹槍を持たせスカイドラゴンと戦えと命じる政府、その政府内部は権力争いで汚れきっておると言うからの」

「ふん」

まじか。戦時中の日本みたいだぜ。怖いわ人間。クロコダインも憤りを隠せないよ

うだ。
「人間同士でもじゃ。なに食わぬ顔で隣人に近付きいきなり自己犠牲呪文を使う自爆テロという手法もあるそうじゃ。他にも思想を無理矢理染め上げ洗脳し兵士として利用するなどしておるらしい。……やれやれ、人間は我らよりよっぽど業が深いわい」
　ほえー。まるで現代みたいだぜ。怖い怖い。
「後は……どうやら我らの動きに勘づいておる人間もいるようじゃ。先日、こちらに潜り込んでいた人間を捕まえての。少し情報を聞き出せたんじゃが、暗黒闘気の使い手の一派の一人のようじゃ。あと、面白い事に今人間界では悪い事件が起これば全て”ヒュンケル”のせいという事になっておるらしい。それを利用して悪さをする連中が多発しておるとか。きっしっし。人気者じゃなヒュンケル？」
「……エイミから聞いている。クズ共めが」
　ほえー。ヒュンケルをスケープゴートにしている奴らもいると。最低だな俺ももっとやろう。にしてもマリン何やってんの。
「ああ、悪いが人間と交流があるかも知れないヒュンケルやエイミ、ポップ、フレイザードちゃんの動きを少し監視させてもらったぞ？　まあ皆、白じゃったがな。……ポップお主以外は」
　全員が俺を一斉に向いた。フレイザードちゃんは一瞬顔を上げて何か言おうとした

けど黙ったままだ。ん？　俺なんかしたっけ？
「お主の行動だけは分からん日が幾つもあった。……お主、何を裏でしておる？」
「あー、言わなきゃ駄目？」
「今、限りなく怪しい男だからの」
「まー確かに今の話だと人間は卑劣で最低なクズだからなぁ」

ケラケラと笑うポップ。ちなみに情報の発信源は全部酔っ払いながら適当にしゃべったこいつである。

「人間植民地国家」
「……なんじゃと？」
「まず準備段階として、ある国の食料を一斉に買い上げます。んでもって国の主要な陸路や海路をモンスターで封鎖し孤立させます。そして第一段階としてある国の王族や幹部に爆弾岩を入れた魔法の筒を飲ませます。ついでに見せしめに一人爆破します。そして国の税を１０倍にさせて半年ほど寝かせます」
「……。」
「食料が無くなり、食料の価格は暴騰しさらに重税を強いられるも国から出る事も出来

ない。当然不満は全て王族連中に降りかかります。ここまでが第一段階」

なんか全員黙っちゃった。まあええか。

「そして第二段階は魔族が魔物を連れ”王城のみ”を襲撃し、国を乗っ取ります。国民は更なる絶望に染まります。そして買い占めていた食料を、元の僅か１．２倍という良心的な価格で解放します。更に１０倍だった税も元の僅か１．５倍に引き下げます。あれ？　人間の王族より魔族のほうが良いなと人間は思います。そうする事で人間は喜んで食料を魔族に献上します」

「……回りくどくないかの？　力で支配したほうが早いわい。モシャスで入れ替わっても良いと思うがの」

「いやいやいやいや。人間が魔王軍に”喜んで”献上って所が面白いんじゃない。そして第三段階として魔族や魔物がどんどん城内や街に住み着きます。始めは怖がるでしょうが、印象が良いので馴染むのも多少は早いでしょう」

ポップの話に全員が絶句している。

「そして魔王軍と人間軍の混成部隊が他国の侵略を開始します。地上が人間だけの時代は終わったーとか言いながら。勿論前線は人間メインで。ほら、懐が痛まない。見てて

面白い。食料も調達出来る。どう？」
「お主、最近行動が掴めなかったのは……」
「第一段階まで完了済み。国の名前はリンガイア王国」
『ハッハッハッハッハ』
突如、笑い声が悪魔の目玉を通して会議室に響き渡った。声の主は当然大魔王バーン様である。……許可無しで勝手にやって途中でばれちゃったから大丈夫やろか。と思ったら面白そうだからやれと言われた。そうだろうそうだろう。あんた最終的には黒の核晶で地上吹っ飛ばせば良いと思ってるだろうから面白いに越したこと無いもんな。リンガイア王国とかもともと滅びる運命だったんだから別に何したってええやろ。まあ戦争なんてシミュレーションゲームけっこうやったからなんとかなるやろ。……恋姫無双って戦争シミュレーションゲームであってる？
まあ俺はとりあえずフレイザードちゃんの為の国を作りたいだけなんだけどね。

１８．やっぱりダイが大冒険始めた模様。あとメルルが怖い

速報、ダイ君家出（城出？）する。

おいこらバラン。お前なにやってんだよ。いやまあ、さっきから俺の部屋に来てやけ酒飲みながら愚痴ってるから大体は把握したのだけれど。人間に、英雄譚に憧れるダイ君に「人間を滅ぼす」「なんでだよ！」「いいから聞け！」と喧嘩になったと。馬鹿ですか。馬鹿なのですか。不器用にも程があるだろうがこの親父。人間と魔物が暮らせる国を作るって言っとけばダイ君協力してくれたと思うのに。一流のモンスターテイマーやぞダイ君。お前に任せたのが間違いだったわ。

それに断言するが、絶対どっかでぶっ倒れてそれをアバンが見つけて保護、指導する流れになると思うぞ。なんとなくだが自信あるわ。おつまみ用のメンマを賭けてもいい。お前責任もってなんとかしろよ。竜の騎士相手とかお前で懲りたからな俺は。

「お父様ー！聞いて聞いてー！」

フレイザードちゃんが嬉しそうに部屋に飛び込んで来たので、酒臭いバランを部屋から叩き出した。我が癒しフレイザードちゃんに比べれば竜の騎士の親子問題なんて些細な事よ。

「どうしたんだ？」

「今日ねー、初めてチェスでバーン様に勝ったよー！」

「……お、おう、凄いなそれは」

え？　物語中盤まで姿をハドラーにすら見せてなかったバーンとチェスしてたの？

いつの間にそんなに仲良くなったの？

「……布越しで？」

「チェスは対面でするものだよー？」

だよね。この娘のコミュ力凄すぎ。流石に戦慄したわ。

「でねー。バーン様に暴魔のメダルっていうのを貰ったの！」

おおう。あの忠誠心を試すイベント起こらないなと思ったらなにしてんだよバーン。

「これ、お父様に上げるね！」

……いらねー。流石にいらねー。マトリフの呪いのベルトだけじゃなくそれまで装備した「……いらない？」いに決まってるわ。誰だよいらないとか言った奴。「ありがとうな」って言ったら満面の笑みで俺にメダルを装備させるフレイザードちゃん。ええ

よ。その笑顔があれば俺戦えるわ。
「出来た！　……あれ？　これ、外れない？」
あはははは。これも呪いのアイテムか。俺いま風呂入る時、全裸にマトリフのベルトとかいう謎の罰ゲーム状態なのに暴魔のメダルが加わりました。ええよ。フレイザードちゃんがくれたものだもの。喜んでずっと付けとくわ。
「……お父様。外れなくなっちゃった」
「気にするなって。本当に嬉しかったからずっと付けとくよ」
「うん！」
はー。癒されるわー。この後リンガイア行って街の様子見に行かなくちゃ行けないからだるいなーと思ってたけど、やる気出てきたわ。
そう、多分このやる気がフラグだったのだと思う。

めちゃめちゃマッチョで暴魔のメダルとダサいベルトを装備しているというごく普通の風体をしている俺は、まったく目立つことなく街中の視線を浴びながら街をふらふら歩いていた。心なしか、皆自然と俺から距離をとっている気がするが、皆シャイなんだと思う。

「おお、めっちゃ高いな。とても買えないわ」

芋というより根っこだなと思えるような代物が、凄まじい価格で売られている。ここはジンバブエかな？　さすがにジンバブエよりましか。ここから更にジンバブエ状態にしてもいいけど、そこまでやると立て直すのが面倒なので適度が大切だよ。

「……あの、すいません」

「ほえ？」

とても珍しい事に、久しぶりに後ろから声を掛けられた。振り返ると占い師の少女が立っていた。……あれ？　メルルじゃね？　なんでこんな所にいるの？

「あの、ポップさん、ですよね？」

「ア、ハイ」

そしてなんで名前知ってるの？　怖いわ。よし、逃げよ「貴方を探してました。早くお会いしたかったので。旦那様」

……ん？　今なんて言った？　げんちょ「幻聴ではありませんよ」
心読まれてやんの草生えるわ。

「えーっと、メルル？」
「なんでしょう？」
こちらを見てニコリと笑うメルル。超怖い。
「初対面だよね？」
「はい」
「いきなり旦那様とかもうわけわかんないんだけど」
「この世界の人間では無いポップさんにも分からない事があるんですか？」
「ななにを言っているのかなあ君は、それにぼかぁ君の事なんて知らな」
「私、名乗ってませんよ？　よく名をご存知で」

話を聞くとメルルはある日占いをしていたら、急に未来が見えたらしい。人間と魔物が一緒に暮らす国の王となった俺。そしてその俺を占いで覗いた結果、よく分からなかったらしい。この世界の人間ではないという事以外は。なんなの占いって。超怖いんだけど。それ占いじゃなくて予知とかそういう次元というか、その占いの球って中に

ウィキペディア入ってたりするの？　それ頂戴。

「差し上げてもいいですが、普通の占いの球ですよ？」

「心読むの辞めてくれませんかねえ……」

「ふふふ」

あーメルルちゃん可愛いわー（棒）

なんか凄く怖いけど放っておく訳にもいかず、とりあえず鬼岩城（もうすぐ完工）に連れて帰った。フレイザードちゃんに「その人誰！」っと何故か怒られたりしたが、上手く説明出来ずに「……誰だろう？」と思った事をそのまま言ってしまい、拗ねられてしまった。ごめんよ。俺もよくわからないんだよフレイザードちゃん。多分ストーカーとかそういう類いだと思うの。そりゃ見た目は可愛いんだけど、流石にこれ恐怖が勝つわ。ダイ君の居場所とか頼めば余裕で分かりそうだけど、頼み事をして貸しを作りたくないのでパスする方向です。バラン、お前はお前でなんとかしろ。俺、自分だけで精一杯だわ。

１９．リンガイア王国、地図から消える

リンガイア王国。今リンガイアは王の暴政に、民は嘆き恨みの声が天高く響き渡っていた。国としての体裁を保つ事すら既に限界であった。怨嗟の声が拡がる領内において、ついに民が立ち上がり王城へ詰め掛けた。そして、ちょうど国民皆が目撃する。

王城へ組織だった魔物が強襲する。

――その日、リンガイア王国は終わりを迎えた。

「という訳で、リンガイア改めて新しい名前を考えました！」

「わー」

王城の一角。血生臭い玉座の間を、魔物達に掃除宜しくとポップは告げて会議に使う広い部屋にてとりあえず新たな国名を決める事にした。何故一番始めがそれなのか。もっとやることたくさんあるだろと思うかも知れないが、その通りです。でもポップだから仕方ないね。一緒にルーラでやってきたフレイザードちゃんやメルルも参加して

います。ただ、血生臭い場面はポップは二人に見せていません。国名に関しては今回の褒美という事でバーンから好きに付けて良いと許可済みなのです。

「新たな国名は……ディ○ニーランド！」
「駄目です」
「ええ……これ、夢の国って意味だよ？　人と魔が共に暮らす夢の国だよ？」
「お父様……なんでか分からないけど駄目だと思う」
　ポップは思う。まじかよ。五秒くらい必死に考えたのにと。
「……じゃあもう候補無いです」
「はい！」
「じゃあフレイザードちゃん！」
「ＫＯＰ（キングダムオブポップ）でいいと思います！」
「ええー……で、でもそれじゃほら、呼び名と被る……」
「ＫＯＰ（キングダムオブポップ）のキング、ＫＯＰ（キングオブポップ）！」
　ポップドン引き。ええー……。なんでフレイザードちゃんそんな目をキラキラさせて言ってるのかなと思った矢先、フレイザードちゃんの上目遣い足す少し涙目による「……駄目？」という一言で国名がＫＯＰに決定しました。

「ふふ、おめでとうポップさん」
「これめでたいのか判断付かないんだけど」
「世界地図に名が刻まれますよ？」
「なおさら恥ずかしいわ」
「……むー」
　メルルと話すと、何故かフレイザードちゃんがすぐ拗ねるのがポップの最近の悩みなのです。

　それはともかく魔族と魔物が強襲し、王族が滅びたこのリンガイアは、何故か人間のポップが新たな国名を城の前に集まっていた国民に声高らかに宣言した。圧政に苦しんだ先にあったものが、まさかの魔族による統治の始まりであったのだ。しかしその魔族に対抗出来うる兵士は討たれてしまっている。国からも街道をモンスターが塞ぎ出ることが出来ない。国民は絶望した。
　その後国民が皆、王族が城に溜め込んでいると思っていた食料が国内に解放されたのを皮切りに、税率の引き下げ、更に荒れていた国内のインフラ整備の為の公共事業の開始の為、労働者募集による仕事が無くなっていたものへの職業の斡旋などによって国内の景気は圧政以前のように、いやそれ以上に回復していった。ＫＯＰの国民は思う。な

んだよ。魔族の統治いいじゃねえか。魔族って寿命長いんだろ？　じゃあこの統治ずっと続くのか。いいじゃねえかと。しかしその評判が良いＫＯＰのキング、ＫＯＰという中々に紛らわしい名前を持つ男に重大な問題が発生する。

「私、もうお父様の事、お父様って呼ばないから！」
「……え、な、なんで!?」
「これからは、ポ、ポップって……名前で呼ぶから！」
「あらあら」
「ま、負けないんだから！」

キッと睨むフレイザードちゃんに、笑顔で返すメルル。絶望に染まるポップの顔。キングダムオブポップは今日も平和です。

２０．魔軍司令の外道策略

魔軍司令　　：ポップ
魔軍司令補佐　：メルル
司令補佐代理　：ハドラー
百獣魔団軍団長：獣王クロコダイン
妖魔士団軍団長：妖魔司教ザボエラ
不死騎団軍団長：魔剣戦士ヒュンケル
氷炎魔団軍団長：とっても可愛い氷炎将軍フレイザード
魔影軍団軍団長：魔影参謀ミストバーン
超竜軍団軍団長：竜騎将バラン
料理長　　：みんなのおかんにしてヒュンケルの嫁エイミ

という内示が出た。お気付きだろうか。メルル何やってんだよ。「ちょっとバーン様とお話をしてきます」とか言った結果がこれだよ。改めてメルルに恐怖を感じる。そしてハドラーは補佐の代理である。予備の予備みたいな立ち位置、というかメルルの代理

である。なんかごめん。まあ大体予定調和みたいなもんだからそれはいいんだ。魔軍司令直属の親衛隊のアークデーモンやらガーゴイルやらに挨拶する際に、ＫＯＰコールが起こってサイン攻めで大変だったくらいだね。

最近やった事といえば、諸国に手紙を出したんだ。

”もうリンガイア無いから。これからは魔族と魔物と人間が共に暮らす国、キングダムオブポップだから。そこんとこ夜露四苦！　ｂｙ元パプニカ三賢者ポップ”

という我ながら完璧な手紙を鼻くそで糊付けして送った。

するとだ。

なんという事でしょう。一週間もしないうちにベンガーナから宣戦布告された。うける。非常に好戦的ですね。まあ間にテランもあるからすぐには来ないしいいかと思ってたら、テラン素通りしてすぐにやってきた。うける。初戦はガチろうと思って、バランとヒュンケルとクロコダインに「やっちゃおう」と言ったら、攻めてきた軍勢は二日でほぼ全壊して撤退していった。わざと生かして恐怖を国に帰って伝えてもらう為に若干手加減してもらったので、多分後々の交渉に役立つだろう。多分。勘だけど。

まあパプニカはなんか世界中から糾弾されてるらしいからこっちに対応する余裕なんてないだろう。遠いし。うちの国、日本地図でいうと青森的な位置にあるからな。パプニカは高知らへんだからねえ。ちなみに山脈挟んでテランが名古屋でベンガーナは大阪らへんかな？

オーザムがちょっと変則的だけど北海道で、カール王国が広島、ロモスが熊本辺りだ。え？　オーザムのが近いって？　海渡ったら山脈だらけで大回りしないといけないんだよ。オーザムならカールからのほうが近いんやで。詳しくは”ダイの大冒険　地図”でググってくれ。

まあなんだ、初陣を完勝した後、バーンにこの後どの軍がどの国を攻めるか決めてよいとか言われたから「一つずつ全軍で圧倒的物量で叩き潰します」って答えたらバーン引いてた。……正直ガチるなら当たり前だと思うんだけど。まあ降伏は受け入れるよ？　全ての大陸の全ての国、全部人と魔が共存する国にしちゃうんだから。そこまでしたらバーンも地上消滅させる必要ないだろうし、何よりフレイザードちゃんが生きやすい世界になるだろう。ま、とりあえずベンガーナの軍は叩き潰します。

唯一の不安はダイ君なんだけどね。とか思ってたら気付いたらいなくなってたハドラーが両腕無くなって体に×の字刻まれた状態で瀕死で帰ってきた。

師弟からアバンストラッシュ喰らってやんの草生える。じゃなかったやっぱ弟子入

りしとるやんけ。しかも話聞いたらアバンも倒せず撤退してるやんけ。お前何してんだよまじで。……あ、そうか。ダイ君バランからちょっと鍛えられてるからな。原作開始よりよっぽど強いわ。バランが「流石我が息子よ……」とか言い出して「うちのフレイザードちゃんのほうが強いわ！」とちょっとした口論になったりもしたが、やっぱりダイ君は壁になるのかねー。

とか思ってたら城に客人が来てメルルが接客してるらしいので、会うことにしたらアバン先生が一人で来てました。

なんでや。

２１．アバンとポップ

「結婚おめでとう、ポップ。随分体つきが変わりましたね？」
「ぶふおおお」
　アバンの先制口撃。ポップは吹き出した。
「おや？　どうかしましたか？」
「いやー、えっと、メルル？」
「なんでしょう旦那様」
「ナンデモナイデス。……アバン先生、よく城の中まで来れましたね。アバン先生うちではめっちゃ要注意人物として手配されてるんですけど」
「おや？　あなたの指示なのでしょうポップ。私も城の近くまで来て悩んでいた所にメルルさんがやってきて、メルルさんの案内で。ここに来るまで誰一人として会いませんでしたよ？」
「ふふふ」
　……おおう。メルル相変わらずとんでもねえ。手を口元にやって可憐に笑うメルルが大魔王かなんかに見えた。バグってるだろこれ。メルルが一番チートな気がしてき

たぞ。
「……ところでポップ、貴方のやった事、許される事ではありません。分かっているんでしょうね？」
　アバンの顔付きは真剣そのもの。まあ単身でわざわざ乗り込んで来るくらいだしそりゃそうか。つってもアバン相手に話しても口車負けそうだしなあ。適当に話しても無駄かな。
「別に誰からも許してもらおうなんて思ってないし。リンガイアの王族を殺したのは事実だし、ベンガーナと戦争始めて遠征軍壊滅させたのも事実だし」
「何故そんな事を」
「魔物や魔族は全部悪？　人間は全部善？　魔族は魔界で日の当たらない生活をしなければならないのは何故？　人はそれほど偉いの？」
「それは……」
「俺、全部ぶっ壊すよ。俺が間違ってるんじゃない。世界が間違ってる。血も流れずに世界が変わる訳が無い。変革には痛みが伴うだろう。だから何？　俺はやるよ。人と魔が共存する為だもの。それは（フレイザードちゃんが笑顔で暮らす為）必要な事だから」
「……人がたくさん死にます」

「人と魔の共存を受け入れてくれるなら殺さない。ベンガーナは向こうから攻めてきた。勇者アバン。魔族には俺の友人がたくさんいる。俺の友人を殺すのであれば貴方は敵だ。貴方は敵か？」
「……。」

……勢いで喋ったが、俺、正直目の前のチート眼鏡に勝てる気しないんだよね。どうしようかな。なんかアバンも黙っちゃってるし。

「……世界が間違ってる。本気でそう思っているんですね？」
「笑って過ごしてもらいたい娘がいる。その娘が笑って過ごせない世界なら世界ごと変えてやる。ただそれだけなんだけどね」
「人と魔が共に暮らせますか」
「少なくとも今のリンガイアは出来てる。そりゃ改革には反発もあるのは当然。出来ない国もあるかも知れない、だからやらないなんて選択肢はない」
「……そうですか」
「……。」

黙って見られると超怖いんだけど。フレイザードちゃんに頼んで不意討ちでメドローアで消滅してもらおうかしら。でもこの人、実はシャハルの鏡持ってましたーとかで跳ね返したりしても何も驚かないくらいよく分からない人だから迂闊な事しないほうがいいよな。むー。

「……ふぅ、そうだポップ、約束の物です」
「……それ……アバンのしるし。いや、先生俺破門でいいよ。迷惑だろこんな弟子は」
「そうですね。貴方のやった事は決して許される事ではありません。ですが貴方を育てた私も同罪でしょう。私は貴方の先生ですからね」
「じゃあ罪代わりに全部被っちゃって下さい」
「貴方が言いますか？　……罪とも思ってないのでしょう？」
「……見抜かれてらぁ。で人の勇者たるアバン先生はこれからどうする気で？」
「貴方が本気なのは分かりました。魔物や魔族、全てが善と思っている訳でもないのですね？」
「当たり前だろ。悪党は人でも魔でもぶん殴るわ」
「……私はカール王国へ行きます。正直、貴方を殺して私も死ぬ覚悟で来ましたが、我が弟子の罪、私も付き合わせてもらいますよ。貴方と共に地獄に落ちましょう。フローラ

女王を説得してみます」
「さすが魔軍司令参謀アバン！」
「……いやそれは流石にどうかと」
「まあまあまあいいからいいから。戦にならないならカールの人間は殺さない。それは確約するよ。城や街に魔族も住み始めるし、反発凄いと思うけど。それはほら、フローラ女王とアバン先生の結婚を条件にすればフローラ女王も首を縦に振る事間違いないなしだわ」
「いやそれは流石に……」
「ついでにいえば多分俺殺したほうが魔王軍、性質が悪いよ？　共存なんて考えず無差別に人間殺しにいくだろうしね」
「それはそうでしょうね。直接会ってよく分かりました」
「ではそろそろ誰か来そうなので城外まで案内しますねアバン様」
「分かりました。ではポップ」
「心臓に悪いのであまり来ないで下さい」
「おやおや、随分な言い様ですね。……ではまた」

アバンとメルルが応接部屋から出ていった疲れたー。と思っていたら数分後、ヒュン

ケルがやってきた。あぶねー。間一髪やん。絶対殺し合いになってたわ。もう魂の貝殻無いから誤解の解けないよね。どうしよう。と思ってたら机に置かれてたアバンのしるしを見られてすごい睨まれた。とりあえずヒュンケルの首飾りが格好良かったからパチもん作ったとか言って誤魔化したら、満更でも無さそうだった。チョロい。あ、アバンにダイ君の事聞くの忘れた。

２２．でろりんって凄い名前だよなあ

　ＫＯＰの諸国への手紙からベンガーナの敗走といった世界中に衝撃を与えるニュースが続く中で、更なる衝撃的ニュースが世界を駆け巡った。あの、世界中で魔物を倒しその勇名は留まる事を知らない勇者でろりんがＫＯＰを支持するとの声明を発表したのだ。その勇者による声明は世界中の国民を大きく混乱させた。ポップが脅して言わせただけです。更に勇者でろりんはすでにＫＯＰ側に合流し、ベンガーナとの戦いでも最前線で活躍しているという。でろりん程度でも一般兵相手なら無双出来るやろと拉致ってきて脅して働かせているのはポップである。でろりん達に選択権などない。ないんだよ。ともあれ、”勇者”という分かりやすい世界の希望が人間と魔族との共存を支持したというニュースに、世界は驚きを隠せなかった。

　そんなある日、各地でモンスターが少年に殺されているという情報が入った。絶対ダイ君だな。ていうかさ、デルムリン島とかいうモンスター島で生まれ育ったくせによくモンスター殺せるよなダイ君。純粋って怖いわー。それはそれとして第二次ベンガーナ遠征軍をミストとザボエラの混合軍で壊滅させた我が魔王軍は、テランまでの道のりが海道沿いしかないのが不満だったので新たな街道を山脈を消し飛ばしながら作りま

した。
「メドローア!!!」
「ベタン!!!」
　フレイザードちゃんのメドローアで障害を消滅させて俺がベタンで大地を均して整地する。こうして出来た新たな街道は第一ＦＰ街道と名付けられました。ファイナンシャルプランナーではありません。フレイザードちゃんポップ街道です。いやＫＯＰの旧名とテランで普通にリンガイアテラン新道にしようとしたら、フレイザードちゃんが「……駄目？」って聞いてきました。即決しました。
　そういう事もこなしながら中央に位置するギルドメイン大陸の四大王国の一つであるテランまで新道使ってやってきました。竜の神を信仰する森と湖に隣接した静かな王国。原作では魔王軍からも侵略価値がないと思われ侵攻を受けずに済んだ国。ダイ達が来なければノーダメージだった国である。国王のフォルケンは８０歳の高齢のおじいちゃんでかつて、武力放棄して平和主義を貫こうとしたが、そのせいで国民は物が豊かな他の国に流れていき、全人口は５０人ばかりにまで減少している。ぶっちゃけ国というか廃村寸前レベルである。ただし、世界地図的に立地がいい。あと自然が豊かなのでモンスター達が暮らすのにちょうどいい。というか既に森の中に沢山住んでいるから、もう共存してるようなものだし。魔界の魔族とか魔物の移住先はここをメインに

しよう。つー訳でフォルケンおじいちゃんとお話する為にメルルとフレイザードちゃんと一緒に城にやってきました。
「この国、俺達に任せて隠居しない？」
「い、いきなりなんと無礼な……!?」
「すいません、ポップさんこうした言い方しか出来ない人なんですが、高齢を心配してなんです」
「よい。そなたは……確かナバラの孫娘の」
「はい、メルルにございます」
　開幕、俺の言った言葉に怒り出す側近のモブを窘めるフォルケン。そしてメルルに話し掛ける。俺は無視ですかそーですか。
「くすっ。旦那様怒らないで下さい」
「旦那……そうか、メルル。未来が見えたのか」
「はい。世界の変革とその中心が。……もう一つのあったはずの未来と共に。もっとも、見えずとも勇者アバン、勇者でろりん、元魔王ハドラーに魔界の魔族や魔物、元リンガイア王国の住民その全てがポップさんと共に世界を変えようとしています。この世界は変わります」
「そうか……」

改めて言われるとハドラーは怪しいけどなんかすげえな。と他人事みたいに感心していると、フォルケンおじいちゃんが俺に話し掛けてきた。
「魔王ポップよ。この国の住民を傷付けぬと誓うか？」
「いや魔王じゃないんだけど……え、俺魔王って呼ばれてんの？　……ま、まあ自分の国の国民なら傷付けるような国にする気はないよ？　目的は共存だし。敵なら潰すけどね、容赦無く」
「……分かった。隠居か」
「もう年なんだから無理すんなって。案外変わった世界も悪い世界じゃないかもよ？」
「……メルルがいるからそうなのであろう。テランは任せる」
「あいよー」
「おじいちゃん、これ上げるね！」

フレイザードちゃんは城の周りで編んでいた花冠をフォルケンおじいちゃんに手渡した。

「おじいちゃん、長生きしてね！」
「……優しい娘だな。魔族の娘か。……なるほどな」

フレイザードちゃんを撫でながら何か納得しているフォルケンおじいちゃん。おいこらじじい。調子乗ってんじゃねえぞ。いますぐ引導渡してやろうかこら。言っておくが、俺基準の悪党とそうじゃない奴は気に入ったか気に入ってないかだけだからな。年寄りだろうが遠慮しねえぞこの野郎と思ったが、フレイザードちゃんが笑顔なので許してやろう。フレイザードちゃんに感謝しろよじじい。

23．キルバーン、メルルの策略に嵌まる

どーも。キングダムオブポップのキング、プロレス王者の魔王キングオブポップです。王多くない？

まあなんつーかアレですわ。キルバーンに襲われました。いきなり背後から鎌がニョキっと生えてきて異次元に拉致られそうになりました。もっと驚きなのは「今です」というメルルの声と共にどこからともなく現れたクロコダインが鎌を掴んで、異次元から引き釣り出して地面に叩きつけ、これまたどっかから現れたヒュンケルのブラッディスクライドによりピロロが串刺しにされてキルバーン人形が動かなくなりました。「ご無事で何よりです」ってメルルが言うじゃない？　もうね、超怖いんですが。全部メルルの指示なんかい。なんかよく分からないうちにキルバーン死んだ。俺襲われただけ。どういう事。

「イルイル」
「ちょっ」
「なんでしょうか？」

キルバーン人形を魔法の筒に収納したメルルが筒を持ってにっこり笑う。これで黒の核晶は君のものだね。何する気だよ。世界を滅ぼすんですかね。俺、在り方を壊すだけで世界そのものは壊さないよ？　住み辛そうだしさ。いっそそれ操れるようになんねえかな。アバン辺りならいけそうな気がする。

「狙い通りだな？　ＫＯＰ」

狙いって何の事でしょうヒュンケルさんや。肩をポンポン叩かないでクロコダイン。俺関わってない。ないんだよ。何の説明も受けてないんだよ。もう混乱しまくりだよ。誰がバーンになんて説明するんだよ。俺？　俺なの？　ふえーん面倒臭いよー。

「あ、ヒュンケルだー」

フレイザードちゃんがとてとてと走ってきた。おおう、可愛いなあ。フレイザードちゃんを見てにっこり笑うメルル。やめて！　今度は何を企んでるの！

「はいこれ上げる」
「!?」
フレイザードちゃんがヒュンケルに差し出したそれ。なんでそれがここにあるの!?
見覚えがある形してるよ!?
「……これは?」
「なんかねー、ヒュンケル宛の声が聴こえるの。パプニカの地底魔城の宝箱の中に入ってたの」

……どういう事だってばよ。俺、割ったよね? あれ、別物? い、いや確かに耳に当てたの間違って煮込んだ後の一回だけだけどさあ。じゃあ何か? あれは壊れて聞こえた声じゃなくてマジもんのおっさんの喘ぎ声だったのか。なーんだそうか。

オエエエエエ。
なんて罠を仕掛けてあるんだよ地底魔城。オーク×オークとかそういう薄い本ならぬ貝殻だったって事かよ。未来に生きてんな地底魔城。

「おのれハドラァァァァ!!!」

そんなどーでもいい事を考えて現実逃避してたら、魂の貝殻の声を聞き終わったヒュンケルがキレた。俺も聞いたぜ、おっさんの魂の声をよお。

「ところでフレイザードちゃんいつ地底魔城に？」

「あ……」

「大丈夫、ポップさん怒らないわよ」

「……レオナとの待ち合わせの場所に使ったの」

ああ、レオナ友達だもんな。フレイザードちゃんいつの間にルーラまで覚えたんですかね。城で会う訳にはいかないだろうし、レオナもこっちの事聞きたかったんだろうな。でもだ。

「……危ない事しちゃ駄目だぞ」

「……ごめんなさい」

「よし許した」

ごめんなさいしたならＯＫだ。済んでしまったもんはしょーがないしね。もう心配させるような事はしないでくれよとフレイザードちゃんの頭をポンポン撫でた。こっちはとりあえずいいとして、後はヒュンケルか。

「ヒュンケル、今ハドラー死にかけて培養液に漬かって復活アンドパワーアップ中なんだけど、復活したらタイマンする？　俺権限で逃げさせないよ？　パワーアップしたハドラーの力を見るとか適当に言っておくけど？　今、寝込みを襲うのは趣味じゃないだろ？」

「……すまん、恩にきる」

いや正直大人なんだから当人達に任せて放っておこうと思ってた問題が解決するなんてまったく思ってなかったよ。ヒュンケルかアバンどっちか死んだら解決かなくらいに思ってたよ。完全に放置するつもりだったから、それくらいはしょうがないからやってやんよ。フレイザードちゃん関連じゃないんで興味無かったからまぁいいかって思ってたけど、フレイザードちゃんが関わってるならちゃんとするよ。後あのオーク魂の貝殻仕掛けたやつはいつか殺す。

２４．闘魔傀儡掌使えるようになりたい

「闘魔傀儡掌！　ブラッディースクライド！　ブラッディスクライドブラッディスクライドブラッディスクライドブラッディィィスクライドォォォォォォ!!!」
「ぐわあああああー!!!」

うわぁー。ブラッディースクライドがゲシュタルト崩壊するー。ヒュンケル対ハドラー、光の闘気が眠りっぱなしのヒュンケルの開幕闘魔傀儡掌からの一方的な串刺しショーが目の前にで行われている。

「……ポップ、ハドラー死んじゃうの？」
「んー、いや激情に刈られているようで心の底は冷静みたいだから殺さないんじゃないかな。脳と心臓は狙ってないし」

軍団長全員で観戦していたらフレイザードちゃんから声を掛けられた。ヒュンケルとりあえず殺さないっぽいな。だからこそリンチ状態になってるんだけど。ハドラー

死んだらフレイザードちゃんヤバくなったりしないよね？　急にそんな事思い出してドキドキし始めたんだけど。万が一とかないよね？　止める？　止めるべき？

「ザボエラおじいちゃん、あれ治る？」

「……脳が無事ならばとだけじゃのう。正直身体を入れ替えたほうが早いかも知れん」

なるほど。つまり頭狙いじゃなければいいと。死ななそうだしちゃんと蘇るならいいや。ヒュンケルどんどんやれ。あらあらと言った具合で笑顔で眺めてるメルルさんや。なんかうっとりしてないかな。何かに目覚めてないですよね？　複雑な表情のフレイザードちゃんとは対極だわ。怖い。

「……あれ、もう行くのバラン？」

「……つまらん」

「あ、そう」

バランが離席した辺りでヒュンケルの手が止まった。珍しく肩で息をしている。ブラッディースクライド連発し過ぎ。そしてハドラーは……うわあ。頭から胴の中心以

外グッチャグチャやん。でも脳と心臓は潰してないんだな。

「ヒュンケル、気が済んだか？」

「……フレイザードに免じて命だけは助けてやると言っておく」

ヒュンケルに声を掛けたらやっぱり生かすつもりだったようだ。なんか約束したのフレイザードちゃん？　それともフレイザードちゃんの生まれを気にしてかな。流石イケメンだぜ。横のフレイザードちゃんは複雑な表情のままだけど。命は助けるとか言ってもハドラー凄い事になってるけど。

「……そっか。じゃあクロコダイン、ザボエラおじいちゃん」

「おう」

「……やれやれ、今度はどう強化するかのお。いっそ虜獲したベンガーナの戦車と合体させてハドラータンク……いやロボ……超電磁コンハドラーV……」

ゴミクズになったハドラーをクロコダインが持ち上げ、ザボエラと共にザボエラの研究室へ向かっていった。なんかザボエラが恐ろしい事言ってた気がしたが気のせいだ

と思います。……改造されて超電磁スピンとか超電磁ヨーヨーとかやりださないよう事を願っておこう。

「ま、これでヒュンケルもちったぁ気が晴れたかな。……フレイザードちゃんどうしたの？」

「ううん……なんでもない」

「あ、そ、そう？」

絶対なんかあるよね？　さっきからいつもの表情じゃないよ。でもそう言われてちゃったら聞けないよね？　俺心読めないんだよフレイザードちゃん。ハドラーのほう？　ヒュンケルのほう？　それともパプニカのレオナ？　困ってメルルをチラっと見たけど「あらあら」って微笑みで返されても更に困るだけなんですが。

「ポップ様！　ベンガーナ軍がテランへ攻めてきました！」

親衛隊のアークデーモンから一報が入る。

「……また？　面倒臭いなあ。じゃあうちの親衛隊と俺と……ミストのとこの軍で宜しく」
「……。」
「待って！」

魔界からのテランへの移住は着々と進んでいるので、そろそろベンガーナも潰さないと面倒だなーと思いながら無言で頷いたミストを見て早速出撃したろと思ったらフレイザードちゃんに止められた。

「ポップ、私も出る」
「いや、フレイザードちゃんは留守番で」
「うちの軍だけ……私だけ一回も戦いに出てないよ！」
「そ、そうだったかな？　いやメドローアあんだけ連発して山切り開いたんだから今回は留守番お願いしたいかな」
「でもっ！　……うん、分かった」

あかん。絶対納得してない顔してる。誰が好き好んでベンガーナ軍とかいう弱いも

のいじめの現場にフレイザードちゃんを連れていきたがるというのか。こんな戦いなんかより新たな街道を切り開いた事のほうがよっぽど有意義だったし、その辺りはちゃんと説明してたはずなんだけど。あんな芸当出来るのフレイザードちゃんだけだよ。メドローア連発って。どんな魔法力してるのフレイザードちゃん。……まあ俺が前線に立ってるから、だろうなぁ。立たなくてもいいんだろうけど、前線にいるのが一番魔力上げれるから出来るだけ前線にいたいんだよな。別に人間を積極的に殺したいとかじゃないよ？　そりゃ向かってくるならやるけど、正直ただのレベリング目的だし。やっと、かろうじて一発だけならメドローア撃てるようになりました。そして最前線で自ら圧倒的な力を振るう魔王として部下から大人気です。意図してない方向でドンドン人気出てます。ベタンで広範囲を圧殺していく時とか歓声が上がります。でろりん辺りはドン引きしてました。

ていうか魔王ってなんやねん。種族ヒューマンだぞ俺。

２５．オリハルコンの駒が恐怖に震えている

ベンガーナ、ＧＥＴだぜ！

テランがある程度落ち着いたのでベンガーナ貰っとこうとひょいひょいやってきたんだぜ。住民から大歓迎を受けたんだぜ。いやー、新聞全社買収して、連日キングダムオブポップの素晴らしさや新連載にして大人気記事である勇者でろりんの共存最高！を始めたり（もちろん全部捏造）、イケメン魔族ラーハルトのグラビア特集とか、商人買収してキングダムオブポップめっちゃ良いところって噂を国中に時間掛けて広めさせたのが功を奏した模様だぜ。

勿論、うちとの戦で負傷したり死んだ兵の家族には恨まれているが、そういった連中はマリンが組織したと噂の暗黒組という反共存及び怨ヒュンケル連合組織が取り込んでいっているらしい。まじかよ那珂ちゃんのファン辞めます。お前パプニカどうしたんだよ。まあこちらとしてもそういった連中が一箇所に固まっていてくれたほうが対処しやすいので今のところ放置している。それに全社買収した一社だけは反共存を詠わせてるしね。反共存派の情報はそっちから集めてるんだぞ。表現や報道の自由？

何それ美味しいの？

と言うわけでもっとやれ。情報戦は完全に頂いているので余裕余裕。プロパガンダ万歳。反共存派は全部そっちへ行ってどうぞ。理想は共存派のトップと反共存派のトップ、両方うちでやりたいがそこまでは面倒なので、そっちの組織の頭は今みたいに頭が固いほうが思考が読みやすいから変わらないでね。まるでどっかの国の政党みたいおっと誰か来たようだ。

住民が共存を受け入れてくれたら後は簡単です。王族纏めてＯＨＡＮＡＳＨＩして隠居して頂くだけの簡単なお仕事です。という訳でここベンガーナはもう今までのベンガーナではありません。でも国名はそのままにしときます。属国という事にしてＫＯＰにプレミアム感を出していきます。みんな大好きやろ？　限定とかプレミアム感とか。

「楽勝だったぜベンガーナ……」
「相変わらず回りくどい上に面倒臭いのう」
「いやいやザボエラおじいちゃん。魔族に頭下げる人間を見て痛快に思ってる奴もいるしええやん。だいたい面倒事はほとんど俺がやってるしいいじゃない。あ、そういやバーン……様から褒美出たんだよ」

「ほう、一体なんじゃ？」
「オリハルコン製のチェスの駒。禁呪で使えってさ」
「ふむ、いつやるんじゃ？」
「いや売ってフレイザードちゃんにプレゼント買おうかなぁと」
　オリハルコン製の駒達は脅えている！
「それならオリハルコンを溶かして作り直したほうが良いものが出来るのではないか？」
「……確かに！」
　オリハルコン製の駒達は恐怖で震えている!!
「まぁ、バーン様から頂いたものなら素直に禁呪を使う材料にしたほうが良いと思うがのう」
「えー……面倒臭い……」
　オリハルコン製の駒達は抗議している！
「禁呪ねえ……またパルプンテの書とか適当に混ぜるかなあ。……ネギとか混ぜたら何が出てくるかな。後は……ハドラーでも混ぜる？」
「お主は……。ふん、まっそれはいいが、お主もうちょっとフレイザードちゃんに頼み事や仕事振ったほうが良いぞ？」

「……あー、やっぱり？　でもなあ……」
「この間、わしの所で愚痴っておったわい。わしも人の事は言えんがのう。……汚い事をさせたくないのも戦わせたくないのも分かるが、信用されてないと思っておる。そのうち暴走するぞ」
「まぁ……うん、分かってるんだけどさ」

「ポップ」
　ベンガーナ城内でザボエラおじいちゃんと話していたら、その話の種であるフレイザードちゃんがレオナ姫と共にやってきた。……傷だらけで。足取りこそしっかりしているものの全身ボロボロである。一瞬でポップの思考が切り替わった。なんでレオナがとかそんなもの全部どうでも良かった。フレイザードちゃんがボロボロなのが問題である。
「よしパプニカを跡形も無く滅ぼそう」
「ポップ、話を聞いて」
「お、おう？」
　フレイザードちゃんが真っ直ぐな目を俺に向け、俺の行動を制した。フレイザードちゃんの視線に思わず飲み込まれてしまう。こんなに力強い視線をする娘だったかな。

僅かな間に、フレイザードちゃんが大きく成長したように感じた。何があったし。
「……パプニカは、聖女フレイザードの誓いの旗の元へ、魔王軍の元へ下ります。それを貴方へ伝えに参りました。魔王ポップ」
「ふぁっ!?　……ほんと何したのさフレイザードちゃん」
「なんでも無いよ、なんでも」
だからなんで魔王やねんレオナまでさぁ、と今それはどうでもいい。ていうか聖女って何!?　何があって何してたのフレイザードちゃん。でもなんでも無いよと笑うフレイザードちゃんのすっきりした笑顔を見ると、何も言えなくなった。きっとフレイザードちゃんは何かをやり遂げたんだと思った。だからとりあえずフレイザードの頭を撫でながら言った。
「……そっか、よくやったねフレイザードちゃん」
「うん！」

フレイザードちゃんの満面の笑みは天使だったので、全部どうでもよくなりました。

26．”フレイ”と親友

「パプニカは……魔王軍と戦う事になるわ」

地底魔城で会ったレオナから、そうはっきり告げられた。言葉を発するまでは躊躇っていたようだったけど覚悟を決めたように発した後はいつもより強い目をしていた。やっぱりレオナはパプニカの姫なんだなってその目を見て思った。

「私個人が貴女と友達である事には変わらないけど……国となると別になるわ」

「分かってるよレオナ、そんなに気を使わなくてもいいわ」

「……ありがとう」

レオナは寂しそうな顔で笑った。そういう表情をしてくれたレオナの気持ち、痛いほど分かった。

「……魔王軍は敵対する者には強いよ」

「分かってるわ。パプニカだって……前大戦を乗り切っているのよ？」
「……うん、そうだね」

パプニカにはハドラーが魔王として居城に使っていた地底魔城がある。要するに前大戦で最も被害が大きかった国。魔族や魔物に対する嫌悪が最も強い国と言っていいとポップが言っていた。レオナは特別だと思えってポップが言っていたがほんとにその通りだと思う。それはポップにパプニカの王城に連れてきて貰う度に感じていた事。

ポップが私を連れてきたのは、そういう反応を見ていたのかも知れない。パプニカに、王城に魔族が来たらどういう反応を国民がするのかを（※そんな事はない。何も考えてない）

パプニカは古い国だとレオナが言った。急過ぎる変化には拒絶反応が起きてしまうと。でもそれは、正しいのかも知れないけどレオナが私に気を使って遠回しに言ってくれただけ。パプニカの街は一見平和そうに見えるが通りの裏に入れば戦争の爪痕が未だに残っている。それはポップが街中を連れ廻してくれた時に見せてくれた。ポップはその爪痕自体には何も言わずに私をただ連れ廻して見せていたけど、私にあれを見せたかったんだろうと魔王軍としてベンガーナと戦争が始まった時に分かった（※そんな意図はありません）

敵は魔王軍として蹂躙する。ポップはそう言っている。でも口でそう言っているけど実際は攻めてきた相手だけを撃退して、テランは話し合いで終わったしベンガーナも交渉で済むように準備して傘下に収めようとしている。裏で汚い事たくさんしてるから余裕だよってポップが言っている。でも、流れる血はただ攻めるより絶対に少ないと思う。それにポップがやっていなかったら共存どころか魔王軍は全部の国に対して一斉に襲撃を掛けていたはずだと、ザボエラおじいちゃんが言っていた。相手が攻めてきた時もポップはなるべく自分が最前線に立ち自ら人間相手に魔法を振るっている。そんな必要はまったくないのに、出来るだけ自分の手だけを赤く染めようとしている（※レベリングの為です）

テランのフォルケンおじいちゃんは有史以来、人と魔の歴史は戦いの歴史だと言っていた。共存など考え個人レベルでもお伽噺でしかない事を、世界規模で行っているポップは世界から見れば正しく破壊者だろうと言っていた。ポップの手は血に染まっている。

私は？

ポップは私が笑顔で生きられる世界を作ると言ってくれた。

私はポップに何か出来ている？

「レオナ、ここでももう会わないほうがいい」
「……そうね」
　レオナとそう言った後、無言でお互い抱擁した。寂しくなるなって思ったけど、私とレオナの立場はそれを許してくれないのだから。長い間抱擁したと思う。お互いどちらからとも無く離れた後、私達は別れを告げた。
「……またね、レオナ」
「ええ、……また、フレイ」
　フレイ。初めての友達のレオナが私に付けてくれた初めての愛称。レオナが口にしてくれた私の愛称を心に刻みながら私はレオナを見送った。

　レオナと別れてから、すぐに私達の城に戻るには私の心の整理が追い付いていなかった。私はなんともなくふらふらと地底魔城をさ迷っていた。何か、顔に風の流れが当たったような気がした。私は風に誘われるように、流れに任せて足を向ける。そこに有ったのは宝箱。地底魔城はパプニカの人間が立ち入り大規模な捜索が行われていると聞いたのに何故宝箱があるのだろう。罠か何かだろうか。意を決して宝箱に手をかける。大概の罠が通じる程、私は弱くないが痛いものは痛いから少しだけ覚悟を決めた。宝箱はあっさり開いた。中から出てきたのは大きな貝殻だった。貝殻を手にする

と魔力の流れを感じた。マジックアイテムの類いだろうか。なんとなく貝殻の口を耳に当てると、子を思う親の心と、ハドラーの非道さが記録されていた。

……これはヒュンケルに届けよう。私はハドラーが嫌いです。だからどうしようという事もないけど。私が生まれ、ポップに出会った。この一点の感謝があるからハドラーをどうこうしようとは思わないけど、嫌いなものはしょうがないと思う。この貝殻から声が聞こえて私は更にハドラーが嫌いになった。

城に戻り努めていつも通り振る舞ったけど、ヒュンケルとハドラーが戦っている様子を見てまた複雑な気持ちになった。私はハドラーが嫌い。でも別に傷付けば良いとか思った事も無い。けれど目の前で、然も怒り狂ったように振る舞うヒュンケルがハドラーを串刺しにしているのは私の行動が原因だから。私はヒュンケルに良かれと思って貝殻を渡したが、間違ってたのかなと思ってしまう。渡し方に問題があったかも知れないと思った。これ以上はヒュンケルの為にも辞めて欲しいと思って見ていたら、ふとヒュンケルと目線が交わった。察してくれたヒュンケルが剣を納めた。ヒュンケルは、冷たい印象が強いが根が優しい。でなければあんなにエイミが惚れてないと思う。エイミが一方的に惚れているように見えるけど、ヒュンケルはいつも然り気無くエイミをフォローしている。私に免じてとヒュンケルが言った。……私はここでも誰かの足枷になって

いる。

ポップの配下のアークデーモンから一報が入る。またポップが自分で前線に出ると言った。私も出ると言った。ポップにだけ手を血に染めさせたくなかった。だけどいつもの様にポップには断られる。

……私はポップに何が出来るのだろうか。

27．少女の戦い　パプニカの奇跡

ポップから、そろそろベンガーナも魔王軍の属国にすると話を聞いた。「王族連中とちょっと話するだけで済みそうだから楽勝」と言ってるけど、やはり私の同行は駄目と言われた。多分話がうまくいかなかった場合、最悪殺すつもりなんだと思う。それをポップは私には決して見せようとしない。

複雑な気持ちだった。何をどうすれば気持ちが晴れるのか分からなかった。でもポップに相談するのは違うと思った。私はルーラでまた地底魔城に跳んだ。今度は待ち合わせなどしていない。ただ、一人になりたくて地底魔城の中に入った。

レオナがいた。泣いていた。いつも明るく気丈に振る舞う彼女が一人で泣いていた。

「レオナ……！」

「フレイ……」

気が付いたらレオナを抱き締めていた。レオナは泣きながら私にごめんなさいと言った。レオナは、城で共存の道を模索していたようだ。だが反発の強さがレオナの予想を遥かに越えていたらしい。レオナは王ではない。レオナ一人で決められるはずがない。抱き締めたレオナは私の腕の中で泣きながら謝り続けている。

「レオナ……大丈夫だよ」
「……フレイ？」
「ごめんね。ラリホー」
私はレオナを眠らせた。そっと壁際に落ち着かせ、私は地底魔城を出た。私自身、突飛な行動だと思う。ポップに危ない事をするなと言われた矢先にする事じゃないと思ったが、親友の涙を見て何かせずにはいられなかった。

私はパプニカの城下街にある広場にやってきた。城下で一番広い国民の休憩所であり子供達の遊び場。だがこの日は生憎の雨で、いつもより人は少なかった。けどパプニカの人々はすぐに私に気が付いた。
『あの目……魔族だ!!!』
広場はパニックになった。以前ならば私を見るだけでここまで拒否反応が起こる事は無かった。ポップが魔王軍と敵対するであろう国はあらゆる情報媒体で魔族や魔物に対する敵意を国民に植え付けていると言っていた、その効果を身をもって体験した。さすがに悲しくなる。がすぐに気を取り直す。この身体はポップとの絆である。私にとって誇るべき身体なのだ。私がここに来た理由は親友が泣いていたからだ。

「皆さん聞いて下さい！」

私はありったけの声で叫んだ。

「何故皆さんは私達と共に生きてはもらえないんですか？　私達はあなた方と共存する道を探しています！」

『悪魔め！』『私の父は魔族に殺された！』『出ていけ悪魔！』

いつの間にかパプニカ中の人々が集まったのではないかと思える人数から散々と降り注ぐ雨と共に罵声と石を投げつけられる。普段の私であれば石をぶつけられたくらいではまったくダメージを受ける事はない。だからあえて私は防御する事を辞め、投石を浴びた。

『見ろ！　血の色が違う！』『やっぱり悪魔だ！』『不気味な目をしやがって！』『早く出ていけ！』

投石を浴び、私の身体から流れる血を見て更に罵声が私に突き刺さる。

「確かに私の目は皆さんとは違います！　私の中に流れる血の色も皆さんとは違います！　だからなんだっていうんですか!?」

『イオ！』

誰かが唱えた爆裂呪文が私の身体を捉える。戦闘体勢に入っていない、無防備な私の身体には例えイオでも私の腕を抉るには充分な効果があった。意図的に防御を辞めているとはいえ、私の顔は苦痛に歪んだかも知れない。

「私の血で皆さんの心が清められるのであれば私はこの血でパプニカを洗い流します！　私が傷つく事で皆さんの心が晴れるのであれば私は喜んでこの身を投げ出します！　だからどうか私の声を聞いてください！」

私が叫ぶ中で数発、私の身体に爆裂呪文が着弾した後、辺りが静まり返った。

「リンガイアでは人間と魔族がすでに共に暮らし始めています。たしかに始めはお互いに距離がありました。ですが今では同じ国民として生活しています。リンガイアで出

来た事が他の国で出来ないなんて私は思いません！」
『嘘だ！』『そんな事を言って俺達を奴隷にするつもりだ！』
「そんな事は私がさせません！　私は皆さんと共に笑顔で暮らしたいだけです！　私は決して戦いません！　皆さんと共に有りたいから！　私は自分の力を決して皆さんに向けません！　私は戦い続けます！　皆さんと共に有る為であれば、皆さんに理不尽が振るわれないよう戦います！」

私は天に向け呪文を放った。大好きなポップから教わった呪文、メドローア。極大消滅呪文の光の矢が天に登り、上空の雨雲に巨大な穴を開けた。広場に、フレイザードに光が舞い降りる。

「私には力があります。皆さんを守るだけの力を、私の大好きな人間、ポップから貰いました。私達魔王軍の指揮を取るのは、このパプニカで三賢者を勤めた、私の大好きなポップです。ポップは人間と魔族が戦わないよう努力を続けています。私の大好きな人は皆さんを奴隷になんかしません。もし、魔族が皆さんに悪さをしようとするなら私が戦います。……どうか信じて下さい」

無防備に投石や呪文を受け続け、傷だらけになり腕の一部を抉られながらも、パプニカの人々にフレイザードはそう言って笑ってみせた。誰かが言った。

『……聖女様だ』

傷だらけになりながら、パプニカの人々を思い叫び続けた彼女を天から光が照らす。

『聖女様だ！』

「……え？　聖女……、あ、あの、私は人間でも魔族でも無いらしいんですが、その聖女というのは違うかと……」

『やっぱり聖女様だ！』『聖女様が私達をお守り下さるんだ！』『城だ！　皆で城に行くんだ！』『聖女様の願いだ！』

「フレイ！」

眠りから覚めたレオナが、地底魔城から戻り人々を掻き分けフレイザードに駆け寄った。

「なんて無茶を……」

傷だらけのフレイザードをレオナが抱き締め、フレイザードにベホマを掛ける。

「ありがとう。……あったかいね。レオナ汚れちゃうよ」
「……馬鹿」
レオナはフレイザードの雨で冷えた身体を抱き締めながら回復呪文をかけ続けた。
『姫様だ！』『姫様も聖女様の味方だ！』
群衆が騒ぎ、一団となって王城へ向かっていった。聖女フレイザードの思いを胸に。
「レオナごめん。……迷惑かけたかも」
「いいのよフレイ。貴女が皆の心を動かしたんだもの。これだけパプニカの国民が動いたのであれば、頭の硬い連中も聞かざる得ないでしょ。……貴女のお陰でパプニカは犠牲が出なくて済むかも知れない。パプニカの王女として感謝するわフレイ」
「……王女としてなんていらないよ」
「え？」
「……私は私の親友が泣いてたから何かしたかっただけだもん」
「……ほんっとに可愛い娘！」
フレイザードをぎゅっとレオナが抱き締めた。
「レオナ、城、行かないと」
「そうね、フレイも一緒にね？」

城門前でもはやデモとなって群衆を空から見ながらトベルーラで城の中に入った二人の前にまず姿を表したのは、前大戦の立役者たる大魔道士だった。

「まったく……馬鹿弟子がなんかトンでもなく馬鹿な事やってるって聞いて城に来てみれば偉い騒ぎに巻き込まれたぜ」

「マトリフ……何故貴方がここに？」

「ああ、姫さんか。……ほらよ」

マトリフが一枚の手紙をレオナに差し出した。丁寧な装飾を施された手紙はカール王国からマトリフに宛てた手紙だった。

「アバンの野郎が、ポップを手伝えなんて言ってくるからよお。何が起こってんだかちょっくら城に嫌々顔を出したらひでえ有り様だぜ」

「ひどい……？　一体何が……？」

「姫様～ッ！」

ドタドタと慌ただしく駆け寄るパプニカの老戦士バダック。バダックの慌てぶりにレオナは逆に落ち着きバダックに対応する。それよりもフレイザードには気になる事があった。

「ポップのベルトの顔に似てる……」
「ああ、あれは俺がくれてやったもんだからな」
「じゃあやっぱり貴方がポップの師匠！　あの、ポップが大変お世話になりました！」
ペコリと頭を下げるフレイザードにぽりぽりと自身の頬を掻きながら照れ臭そうにマトリフが答える。
「あ、ああ。それより広場での啖呵、見事だったぜ。叫び声が城まで届いてたぜ」
「あ、あれはその……」
今度は逆にフレイザードが照れてしまう。
「あれで城の中は大騒ぎだ。それにあの呪文……は後でポップに聞けばいいか」
「えっと……マトリフさんはポップの所に行きますか？」
「そのつもりだったんだけどよ、ちょいと面倒な事に巻き込まれちまってな。城なんか来るんじゃなかったぜ」
「……？」

「分かったわ、直ぐに行くわ。フレイ、私の部屋で待っててくれる？」
「え？　うん、分かったよレオナ」
バタバタとバダックと共にレオナも駆け出して行った。

「今よ、反共存派って奴等がマリンって奴主導で気球を使ってパプニカから出ていったって話でな。パプニカの重鎮連中が多くいなくなったってんで大騒ぎしてる所だ」
「え!?」
「安心しろ、お前のせいじゃねえよ。考えてもみろ。それにしちゃ動きが早すぎるだろ？　……まあ切っ掛けはお前のあの叫びと城門前の群衆だろうが前々からそういう動きをしてたんだろうぜ。だからお前の気にする事じゃねえ」
「……ありがとう。マトリフ優しいね」
「……けっ」
マトリフは悪態をつきながらレオナとバダックが向かったほうへ歩いていった。そういう所はポップと似ているかも知れないと思った。

部屋に戻ってきたレオナから、パプニカの代表としてポップに会うという話を聞いた私はレオナを連れてベンガーナへ向かった。ポップにレオナは言った。
「……パプニカは、聖女フレイザードの誓いの旗の元へ、魔王軍の元へ下ります。それを貴方へ伝えに参りました。魔王ポップ」
もう、レオナまで聖女って……。恥ずかしいから辞めて欲しい。
「ふぁっ!?　……ほんと何したのさフレイザードちゃん」

「なんでも無いよ、なんでも」
「……そっか、よくやったねフレイザードちゃん」
「うん！」
よくやったねと言ってくれながらポップが頭を撫でてくれました。私はそれだけで幸せです。

２８．フレイザードちゃん激おこ

フレイザードちゃんは頑張った。ポップにパプニカを任せて欲しいと訴え自身の氷炎軍団をパプニカの護衛に使い、パプニカの城で、城下で、必死に頑張った。人と魔族が揉めずに共存出来る環境を作る為、人と魔族が笑って暮らす為。全てはポップに褒めて欲しいが為。少しポップと離れて過ごしていたので、フレイザードちゃんは早くポップに会いたかった。久しぶりのＫＯＰ城の中を急ぎタッタッタッタとポップの部屋まで一直線へ駆け出して、ポップの部屋の前につくやいなや、扉をバーンと勢いよく開けた。

「ポップ！　パプニカに入植する魔族の件……なんだけ……ど……」

フレイザードちゃんは固まった。フリーズ。目の前の光景が信じられなかった。

「「「「お父様ー！」」」」

兵士ミク、騎士リン、城兵レン、僧正ゆかり、女王ルカ。

そう、お分かりだろうか。ボカロがいる。ボカロ達がポップに抱きつきキャッキャし

ている。ボカロが抱き付くとか犯罪だろうがポップ死ね。その中心でポップは幸せそうに腑抜けている肥溜めに落ちて窒息して死ね。

その時、フレイザードの中で何か弾けた。

「ポップの……馬鹿〜ッ!!!」

猛虎破砕拳。フレイザードの拳がポップを打ち抜き、見事ポップの身体を吹き飛ばし天井をぶち抜き更にその上階の天井をもぶち抜き、メルルが包帯を持ち待機していた部屋まで飛んでいった。内臓イカれた。

話は少し遡る。フレイザードちゃんが忙しくなり構ってもらえなくなって寂しくなったポップは、禁呪を使った。ザボエラにパルプンテの書を駒分の数を用意してもらい、ネギとか適当に混ぜながら適当な呪文を唱えた。

「脇をペロペロしたくなる子出てこい脇をペロペロしたらプルプルしちゃう子出てこい脇をペロペロしたくなる子出てこい脇をペロペロしたらプルプルしちゃう子出てこい」

横で禁呪を見守っていたザボエラは言った。「長年生きておるがこんな最低な、最も低俗な呪文を聞いたのは初めてじゃ」と。

ともあれ禁呪はある意味成功、ある意味失敗し、ボカロ軍団が生まれた。オリハルコンどこいった。でもやっぱり当然ポップは狂喜乱舞した。ひゃっほーい。これで幸せ家族完成だぜばんざーいと。ポップは働かなくなった。フレイザードちゃんが頑張って働いてる裏でキャッキャウフフしていた。

そしてぶっ飛ばされて今に至る。完全に自業自得である。ポップは今、フレイザードちゃんの前で土下座している。フレイザードちゃん激おこである。

「ポップ、反省してる!?」
「ハイ、ゴメンナサイ」
「その子達誰!?」
「ハイ、あの、フレイザードちゃんの妹です」
「ミクだよ」
「レンです」
「リンだよー」

「ゆかりです」
「ルカよ」
『貴女がお姉様？』
　ボカロ軍団から尋ねられる。この子達に罪は一切無いのは分かっている。フレイザードちゃんはポップを一瞥し、一息吐いた後に笑顔でボカロ達に言った。
「……そうらしいよ、宜しくね？　皆」
『わーい、お姉様だー！』
　ボカロ軍団は一斉にフレイザードちゃんに群がった。全員ポップから離れた。ポップ涙目である。
「あ、あれ？　皆？　お父様はこっちだよー？」
『弱いお父様より強いお姉様のほうがいー！』
「なんだ……と……」
「じゃあ皆行こうか？」
『はい、お姉様！』
「ちょっと待ってー!!!」
「はぁ、ちゃんと反省してねポップ」
　フレイザードちゃんはボカロ軍団を連れてポップの部屋を出た。残当。すれ違いに

追加の包帯を持ったメルルが部屋に入っていった。これも全部あの人の計算尽くなんだろうなぁとフレイザードちゃんはため息を吐いた。とりあえずレオナに妹達を紹介しよう。そう思った。

２９．オーザム乗っ取られ事件と魔王軍一武道会

北に位置するマルノーラ大陸にある唯一の王国オーザム。近隣には魔王軍の本拠地である死の大地がある。場所不遇。原作ではハドラー復活後、フレイザード率いる氷炎軍団の侵略により壊滅。フレイザードの根絶やしにすると言う言葉通りになった国である。

「オーザムが滅びた？」

「それは正確ではありませんよポップ。オーザムは王族全て追いやられ新たな国として生まれ変わったと、我がカール王国に伝達がありました。『今こそ人類が一丸となり魔族を地上から追い出す為に協力せよ！』と」

「ふーん。で？」

ＫＯＰのＫＯＰに会う為にカール王国からの使者としてやってきたアバンの話を鼻をほじほじしながら話半分で聞く我らが腐れ汚物。ポップ個人としてはフレイザードちゃんにボカロ親衛隊を取られてしまい、メルルに慰められその時不思議な事が起こり

気が付いたらベッドの上で天井のシミを数えてる間に何か終わったりしたが、魔王軍的にはパプニカを取り込んで間もないのでとりあえず行動が停滞気味で暇潰しに魔王軍一武道会を開催した。

予選から文字にすればラノベ一冊分くらいの激闘、本戦などそれだけで映画一本作れそうなドラマがあったりしたが、簡単に言うとバランが優勝した。竜の騎士強い。ていうか決勝では竜魔人なってたけど。ポップは準決勝でフレイザードちゃんに負けました。決勝はフレイザードちゃんとバランのメドローア対ドルオーラ対決で地形が変わる激闘だった模様。まさかフレイザードちゃんがメドローアをどこぞの弓兵みたいに多段連射したのを全て避けて、バランがゼロ距離ドルオーラぶつけたカウンターでフレイザードちゃんが同じくゼロ距離メドローアを叩き付けた時は気絶しそうになったね。ほんとフレイザードちゃん生きてて良かった。バランもなんで生きてるの？　フレイザードちゃんは気絶、バランも竜魔人化が衝撃で解けて剣を杖に立つのがやっとだったようだ。

まあフレイザードちゃんバランの弟子だからお互い死なない加減分かってたって後から聞いたけど、もしかしていつもあんな事やってる？　二人して修行しまくって強くなりすぎじゃないですかね？　フレイザードちゃん魔力量どうなってんの？　無限なの？　バランも絶対原作より遥かに強いよね？　なんでメドローアゼロ距離で喰らっ

て生きてんの？　ドラゴニックオーラ凄すぎません？　竜魔人の殺すまで縛りとか何処いったの？　ちょっと二人でバーンさくっと倒してきてくれません？　そろそろ二人ならいける思うんですが。レベリングし過ぎるとクソゲーになるよ？

俺ももっとレベリングしようと思ったポップ。武道会でベスト４で終わったポップは力こそ全ての魔王軍において、その求心力や人気が下降するのは必然かとでも思った？　残念。大会後、ポップの人気はもはや天井知らずとなっている。プロレス王者として予選免除で本選から出場。一回戦の対ラーハルト戦で事件が起こった。

ポップがラーハルトの初撃を避けた事で、会場中から大ブーイングが起こった。王者が避けるとは何事かと、大一番の立ち会いで変化した横綱白鵬のようにブーイングを受けた。ポップは外圧に負け空気を読み、以降全試合において全ての技、攻撃を受けなければならないという一人だけ縛りプレイのベリーハードモードで戦った。

ラーハルトのハーケンディストールを猛虎破砕拳で鎧の魔槍ごと砕いたポップは、二回戦のヒュンケル戦ではブラッディースクライドを素手で鷲掴みするという荒業で止めた。三回戦のクロコダイン戦では試合時間６０分を越える激闘の末、完璧マッスルスパークでクロコダインを仕留めた瞬間に悪魔の目玉を通じ見ていた魔界の住民は勿論、事前にあらゆる地上の国の広場、酒場にも設置した悪魔の目玉ＴＶを通じて見ていた地上の住民は大興奮で歓喜に震えた。文字通り、地上が揺れた。最もトーナメントの巡り

合わせが悪く、激戦に次ぐ激戦を全て技を受けきりながら勝利を重ね、奇跡の逆転ファイターの名を手にしたポップは数々の名勝負を繰り広げ、ポップこそ大会のＭＶＰであるという声が少なくなかった。例え彼が準決勝で力尽きようが、その闘いはまさに王者のそれであった。

そしてそれは魔王と呼ばれた人間の活躍に地上の人間は勇気付けられる事にも何故か繋がった。なんでだろう。初めは魔王軍の化け物ぶりに震えた地上の人間だったが、いつしか人間ポップの戦いに心を震わせ、皆一丸となってポップを応援した。まるで力道山が外人レスラーと戦ってる時のようだ。結果ベスト４となったが、ポップは意図せず魔王軍管轄の人間からも絶大な人気を得る事になった。

でも欲しかったボカロ親衛隊達の声援は皆フレイザードちゃんを応援してたので無かった。無かったんだよ。

ちなみに後一人のベスト４はハドラー。大会後、ザボエラ捕まえて超魔生物がどうとか言っていたからプライドボロボロな模様。バランに瞬殺された後、決勝見て「俺は未熟者だ」とか「思い上がっていた」とかほざいていたらしいよ。ヒュンケルに串刺しにされまくってた時に気付けと言いたい。

「カール王国は魔王軍の傘下に入る事に決まったので、今回はその報告に来ました。オーザムには協力出来ないと使者を送ってます」
「つー事は、オーザムは敵国か。いま魔王軍士気アゲアゲで困ってるからガス抜きには丁度いいかも」
「あの武道会ですか。カールでも話題になりましたよ。勝ち目は無いという判断の決定打となりました。狙い通りですね？」
「まっさかー。お、超でかい鼻くそ取れた。……そうそう、ダイ君はどうしてるかアバン先生分かる？」
「ダイ君ですか？　少しの間指導させてもらいましたが、とても優秀な生徒でしたよ。まさかアバン流刀殺法も三日で完璧に使いこなすとは……」
「まあバランの子で指導も受けてたしねえ」
「ダイ君とは一週間の指導の後に別れたので、それ以来は分かりませんね」
「そっか。オーザム乗っ取ったのはやっぱりパプニカの？」
「はい。元三賢者マリンと、あと元リンガイアで北の勇者と言われたノヴァの二人が主導だったと聞いています」
「ノヴァ？　誰それ？」

「リンガイアで名を上げた少年のようです。ＫＯＰなら知っている人間もいるのでは？」
「分かった。情報ありがとうアバン先生。後はパプニカが落ち着いたらカールにも入植進めるから準備を……フレイザードちゃんと話しながら進めてもらえる？」
「パプニカの聖女ですか。分かりました。彼女ならカールの国民も安心するでしょう」

という訳でひとまずカール王国もこれで問題は無くなった。しかしマリンと一緒に組んだノヴァとかいうぽっと出は一体何者なんだろう。まあ小物だろう。知らんけど。

３０．ダイ君を回収する

最近おかしい事に気が付いた。ていうか気付かないふりに限界がきた。俺、今やメドローア三発撃てる魔法力にクロコダイン並みの耐久力、更に近接では武神流まで使いこなし、プロレスだって超人並みに出来る。

なのに、だ。バランとフレイザードちゃんが凄すぎてチート感がまったく無い。周りのほうが更にチートってどういう事。異世界転生物としてどうなの。それに加え、最近近接でボカロ親衛隊のミク、リン、レンに負け、師匠とやってた魔法力放出勝負でゆかりとルカに負けた。どういう事なの。ボカロ達から苦笑いされたんだけどどうなってんの？　くそ。なんて世の中だ。家出してやる！

「はい、ポップさんお弁当です」

「……アリガトウメルル」

家出しようとしたらメルルから笑顔でお弁当渡されました。行動読まれ過ぎ草生えるわ。……ふ、ふん。家出はしてやるんだからね！　メルルに手を振られながら見送ら

れてＫＯＰ城の外に出ると、何故かそこにはバランがいた。

「……ほう、ポップもくるか。まあいい」

は？　何が？　って聞こうとしたらバランのルーラに巻き込まれました。突然過ぎてひゃあああって裏声で言っちゃった。

それでなんか森のなかに着地したはいいんだけど。えっ、ここどこなの。帰っていい？　あ、家出したんだった。帰れない。はわわ、これは孔明の罠なのですね？　孔メルルなかなかやりおるわ。勝てた事ないわベッドでも。

「……ディーノ」

「……父さん、なんでここに！」

「ふん、こっちに帰ってくるんだ」

「嫌だ！」

着地した先にはダイ君がいて、相変わらず意思の疎通が不器用過ぎる会話をしている。なーにこれ？　超面倒臭いのに巻き込まれた感があるんですが。あ、そういやバラ

ンに優勝の商品希望あるか聞いたらダイ君の居場所って言われたから、しょーがないからメルルに占ってもらってバランに言ってって言ったな。その結果かーっておい、バトルおっ始めやがった。

「いいから帰ってくるんだ！」
「嫌だ！」

……もうね、色々言いたい事あるけどさ。とりあえずダイ君のしちゃって連れて帰ろ？　そして街並み見て魔物と人間が一緒にいるのみたら納得してくれるって。ダイ君的にも理想な街だろ。なんで山籠りして一人で修行してたか分からないけどさーとか考えながら二人の戦いを見てるんだけど。

あれ？　おかしくない？　竜魔人化こそしてないけど、バランガチってるように見えるんだけど。あ、バランがギガブレイク撃った。ダイ君がライディンストラッシュをアバンストラッシュクロスにして二重ライディンストラッシュで受け止めた。ダイ君すげえ。やっぱ戦闘の天才だわ。ん？　ていうか何あの剣。ダイの剣なんてフラグまったく無いはずだよね？　なんで竜の騎士の力にあの剣ついていけるの？　……この森、もしかしてロンベルクの工房のある森か？　いつどうやって知り合ったのかな？　も

う分からない事だらけだよ。もう家出やめる。おうち帰っていい？　バランはよダイ君寝かせろや。

「くっ、もう手加減はせんぞ！」

「やめえええい！」

バランが竜魔人化しそうだったから、とりあえずバランの頭に空手チョップを入れて止めた。ノーダメージだろ、そんなに睨まないで超怖いんですが。

「ポップ、貴様……！」

「もうね、いいからちょっと任せてくれない？　そしてダイ君や、話聞いてくれない？」

「嫌だ！　魔王軍は悪い奴だ！」

誰だよ純粋なダイ君に変な刷り込みした奴はよー。大体モンスターに育てられてその考えおかしいだろうがよー。……しゃーない。

「……ほれ、同じアバンの使徒の話ならどうだ？」

「そっそれはアバンのしるし！　まさかポップも!?」

おー通じた通じた。アバンの指導ちゃんと一週間受けてんだもんなダイ君。これ一応捨てずにとっといて良かったぜ。

「……そ。俺の話でもいいし、何ならアバン先生の所に一緒に話しにいく？　つーかそれがいいな。俺から話するよりそれがいいわ。よし、バランも行くぞ。それがいい」

そうだ。ダイ君に指導してハドラーに襲われた時のアバン先生ならともかく、今のアバン先生ならダイ君を完璧に説得出来るに違いない。アバン先生の状況もあの時とはまったく違うし。いやー持つべきは使える先生だわ。呪いのベルトくれた師匠なんていらんかったんや。猛虎破砕拳はお世話になってます。というわけでダイ君とバラン両方拉致って一度カールに飛び、アバン先生にダイ君説得してもらった後にＫＯＰに飛んで街の様子を見させてダイ君に納得してもらった。……簡単にすんで良かったぜ。ギガブレイク受け止める子とかマジ怖いわ。ていうか絶対俺より強いわ。さすが主人公だぜ。バランにも超感謝された。ここぞとばかりにちゃんと恩を売りつける事は忘れなかった。バランにはやってもらいたい事があるからね。

３１．おじいちゃんの作ったマジンガーは無敵なんだ！

「ふはははははは！　見ろ！　人がゴミのようだ！　踏みにじれ！　矮小な人間どもにマジンガー鬼岩城の強さを知らしめるのだ！　ふはははははは！」
「……調子に乗っておるのう」
「えー？　そこは製作者として同じくノリノリでいく所じゃないのザボエラおじいちゃん」
「ふん、こっちはお主に言われてアレを作るので忙しくてあまり寝れなかったんじゃぞ」
「だって丁度良い動力確保出来たし……お？　よし、そこだ！　ルストハリケーンだ！」

マジンガー鬼岩城の口元に当たる部分から強烈な風がオーザムの兵士に襲いかかる！　ちなみにルストハリケーン＝獣王痛根撃である。クロコダインめっちゃ働かされてる。

我らが魔王軍は魔王軍一武道会で無駄に上がりまくった士気を発散すべく、オーザムへ侵攻を開始した。もう無理ですごめんなさいと言わせるべく、恐怖の象徴も必要だろうと思ってマジンガー鬼岩城も出撃させた。ぶっちゃけ全国規模で放送した魔王軍一

武道会を見たオーザム連中の士気は最低である。バラン対フレイザードちゃんの戦い見てたらそうなるわね。しゃーない。

士気が最高レベルな上に超兵器を持ち出した魔王軍とはなっから士気が最低なオーザム軍。しかしオーザムの上層部は抗戦を選んだ。だって上の連中割りと私利私欲と個人の恨みで動いてた連中だもの。ようはクソである。そんな奴等の命令で戦わされるオーザムの兵士。原作通り死滅してしまうのであろうか？　そんな事は我らがフレイザードちゃんがさせません。傷ついた敵兵に回復呪文をかけ、降伏の意思を確認し、次から次に捕虜として受け入れる作業をしています。天使の笑顔に皆次々に降伏していきます。傷つけて回復させるマッチポンプではあるが、降伏したベンガーナの人間達が王族を除き何の害も無く迫害もされず普通に生活しているという情報がまわっていて、降伏する事にオーザム兵の躊躇はまったくない。むしろ聖女の笑顔を見れてご褒美と言ってもいい。

「ふはははははは！　いけえいマジンガーよ！　憎き人間共を討ち滅ぼすのだあああ！」

「やれやれ、滅ぼす気など毛頭もない癖に……ん？」

マジンガー鬼岩城の正面に一筋の光が立ち上った。数十メートルはあろうかという巨大な光の柱。

「ノオオオザングランブレエエエエドオオオオオオ!!!」

「は？」

斬。

マジンガー鬼岩城が真っ二つに切り裂かれた。ダイの剣装備したダイ並みの威力？

いや、このマジンガー鬼岩城の装甲はキラーマシンの装甲の表面にメタルスライムと同等の金属を塗布した超合金Ｚで出来ているというのに。ていうか頭に乗って操縦してるミストとか乗ってる俺らとか……まず……

落下。

「ぎゃあああああぁぁぁぁぁぁ……」

ぐしゃ。俺だけ落ちた。動揺でトベルーラ使えなかった。ミストやザボエラはともかくクロコダインは飛べないだろうがって思ったけどガルーダがクロコダインの肩掴んでた。咄嗟に動けなかったの俺だけでやんの。

「魔王ポップ！　北の勇者ノヴァが貴様に一騎打ちを申し込む！」
「は？　なんでこっちが圧倒的優勢なのに一騎打ちなんてしてやらないといけないんだよ」
「あの鉄の巨人は僕が倒した！　後は貴様だ！」
「あー、確かに凄い大技だったね。……あと何発撃てるのあれ」
「ふん、貴様を倒すのにあれは不要だ！」
「じゃあもう撃てないんだな？　そりゃあ残念。いけええ！　サンダーブレークだあああ！」

マジンガー鬼岩城を真っ二つにしたノヴァがポップに挑戦状を叩きつけるも、ポップが勝ち誇った顔で指示を出した。一拍の間をおき、雷光が走りポップとノヴァの間に衝撃が落ちる。その光、ギガデイン。

「な、な、なんだとおおお!!?」

ノヴァが驚愕する。鋼鉄の巨人おかわり。グレートマジンガー鬼岩城が現れた。ポップがザボエラに無理させてたのはこれ。武道会の裏でせっせと作らせていたのだ。マジンガーの動力が爆弾岩なのに対し、グレートの動力は黒の核晶。本来ハドラーに埋め込まれる予定だったものを、ザボエラがポップに「これ埋める?」と問い、「いや、バーンの魔力起爆を解除して動力に使おうぜ」と横領したのである。ハドラーの体内には代わりに馬糞がいれてあります。バーンが魔力を込めると馬糞が爆発します。だからなんだよ、臭えよって変な空気になること間違いなし。なんで入れたのかな？　丁度入ったからだよ！

「くっ、ならばこの生命の輝き、もう一度見るがいい！　はあああああ!!!　ノオオオザングランブレエエエエドオオオオオ!!!」

……

斬れませんでした。ノヴァの闘気全開でいっても駄目でした。つっても闘気残りっ

カスだったけど。

「きしゃしゃしゃしゃしゃしゃ！　このグレートマジンガー鬼岩城はなあ！　全身はぐれメタル装甲で、いわば超合金ニューZで出来ているのだ！　加えて！　操縦は竜の騎士！　貴様ごときの闘気が竜闘気に勝てるはずがないだろが！　はーっはっはっはっはっは！」

「くっ、くそ、なんて奴だ。こんな奴に負けるわけには……！」

まるでザボエラのような気持ち悪い声で勝ち誇るポップ。作ったのお前じゃねえよ。

「ノヴァ！　大丈夫!?」

「マリンか！」

ザッと並び立つノヴァとマリン。……ん？　これ一騎打ちですら無いよ？　ていうかやる気なの？　なんなのお前ら。お前ら一応オーザムのボスキャラやろ。そんなに簡単に前線出るなし。人の事言えないけど。あ、俺が魔王だからボスキャラなのか。

「こちらが不利であっても！　貴様さえ倒せば！」
「いくわよノヴァ！」
「おう！」

あー、魔王軍側が静観する姿勢に入った。駄目なんだよ。こっち側どうも一騎打ちとか、戦いの邪魔しない騎士道精神が芽生えてる奴多いんだよ。ていうか二対一やぞ。誰か邪魔してどうぞ。

３２．卑劣なり魔王ポップ！

「闘魔傀儡掌！」
「え、ちょおおおお!?」

マリンがいきなりやばい技打ってきたのでトベルーラで全力で避ける。捕まったらあかん奴だ。俺闘気使えないから脱出出来ないよ。

「オーラブレード!!!」
「おおっとお!?」

避けた先に待ち伏せしていたノヴァが斬りかかる。こいつらガチで殺しにきてやがる。一体何がこいつらをそうさせているんだ！

「チッ、てめえらがその気ならやってやるぜ！　後悔してもおせえぞ！　俺の魔王っぷりを見せつけてやるぜ！　くらえ魔王っぽい呪文！　バシルーラ！」

「え!?　きゃあああああ!!」
「マリン!」

強制離脱呪文。ドラクエ３で魔王が使うマジでむかつく呪文。この世界でいうとポップが作ったオリジナルだ。というかルーラを超雑にした呪文である。特に飛ばす場所をイメージせずただ魔力を込めて方向だけ決めて対象のみをルーラで適当に飛ばす、ルーラの失敗版である。こんだけ雑にすれば多少離れてても飛ばせるんじゃね？という適当な発想で作った、込める魔力で吹き飛ばす勢いと距離を変えられる超便利魔法である。

「ルーラ!」

そしてポップはバシルーラで弾き飛ばしたマリンをルーラで先回りし空中でキャッチした。この男、なんだかんだ器用である。

「え？　あ……きゃあああああ!!!」

キャッチされたマリンが悲鳴を上げる。ポップがマリンをキャッチしている体勢。それは五所蹂躙絡みの体勢。つまりはキン肉バスターの構えである。ようはパンツ丸見えである。どういうキャッチの仕方すればそうなるんですかね？　マリンがじたばたすればするほどマリンのミニスカはふとももからめくれあがっていく。戦場の兵士達は皆マリン（の股間）に釘付けである。

「貴様ポップ！　女性を辱しめるような真似をよくも！」

「ここは戦場だ！　殺し合いをするところだぜ。男も女も関係ねェ、強い奴が生きて弱い奴は死ぬんだよ!!　傷つくのがイヤなら戦場に出てくるんじゃねぇ!!!」

「傷つく意味合いが違うだろうがあああ！」

ノヴァの正論を原作フレイザードの台詞で返すポップ。しかし何故だろう。受けとる印象がまるで違うぞ。

「マリンがどうなってもいいのか！　降参しろ！　このままキン肉バスターを撃てばなぁ……パンツ破れるぞ！」

「え!?」

「そうまでして勝ちたいか卑怯者め!」
「オレは戦うのが好きじゃねぇんだ……勝つのが好きなんだよォォッ!!!　ほれほれどうするんだあ!?　それになぁ……こいつのお腹の子がどうなってもいいのか!?」
「なぁ……!」
　いや嘘だし適当だけど。ポップははったりをかました。そういう関係なのかも知らない。ノヴァを動揺させようと適当に言っただけ。であったはずなのだが。
「嘘……誰にも言ってなかったのに何故貴方がそれを!」
「……へ?」
「マリン!　本当なのか!」
「え、ええ……私のお腹の中には貴方の子が……」
「なんて事だ……ポップ……貴様卑怯にも程があるぞおおお!!!」

　ノヴァ激おこである。むしろポップがこれに動揺している。そして自軍からの白い目が辛い。特にフレイザードちゃんからの白い目がとても辛い。いやほんとに知らなかったんやで。

「あ、いや、その……降参する?」

「くっくそおおお！　わ、分かった……僕はどうなってもいい！　マリンは……お腹に子供がいるマリンだけは助けてくれ！」
「あ、はい」

ポップはマリンをそぉっと地面に降ろした。マリンはノヴァに駆け寄り抱き付いた。

「ノヴァ……ごめんなさい！　私のせいで！」
「いいんだマリン……君は悪くない」

なんか二人の世界が始まっちまったぜ。何これ。
そして背後をちらっと見るとフレイザードちゃんが腕組んで立ってます。おこ？おこなの？

「ポップ、いくら戦いを最小に納める為だって今回のやりかたはどうかと思う。身重の女性を盾にするなんて……最低」

フレイザードちゃんの会心の一撃。ポップのメンタルは死んだ。向こうから手を出

してきたとか、当てずっぽうに言った事が当たっただけとかそんな事置いといて死んだ。この後、ポップはしばらく引き籠る。なんとフレイザードちゃんが会いに来ても会わないくらいの引き籠りっぷりをみせる。フレイザードちゃんが言い過ぎたと謝りたくても会わないくらいに精神が死んだ。ポップにとって全てだったフレイザードちゃんからの会心の一撃だからしょうがないね。

引き籠り魔王はどうでもいいとして、その後恙なくオーザムは併合されていった。併合なんてパプニカやカールを任されたフレイザードちゃんがいればどうとでもなる。つまりＫＯＰなんていらんかったんや。身重のマリンはエイミが面倒を見る事になった。その際、ヒュンケルと出会い、警戒度マックスになったがヒュンケルとエイミの仲を見、また性格もイケメンだったヒュンケルに疑問を抱くも、きっとエイミがヒュンケルを改心させたんだろうとマリンは一人納得する事になる。お前その程度でええんか。

ノヴァはダイ君と知り合いだった。色々吹き込んでたのお前かよ面倒だったんやでと言いたい。まあダイ君と知り合いなら別にいいか、そこそこ強い兵士くらいやろコイツって事でノヴァは自由に放置されているので、マリンと一緒に居ます。魔王軍適当過ぎ。

原作で滅びる定めだった国オーザムは、城を破壊され新たにグレートマジンガー鬼岩城とかいう観光名所が設置された以外はほとんど被害無く魔王軍傘下となった。反共存組の上層部はザボエラが実験材料に回収した。後ついでに言えばアバンとレオナに使者を頼んでおいたロモスはほんと何事もなく魔王軍傘下になった。ロモス被害ゼロ。ロモス王シナナの英断である。これで戦争という意味では特に山場もなく、原作より遥かに被害も少なく全ての国が世界を人と魔が共存する国に作り替えた、世界の理を破壊した魔王ＫＯＰとかいうクソ野郎。これによってフレイザードちゃんの仕事が増える増える。ボカロ親衛隊もフレイザードちゃんを手伝う。フレイザードちゃん超忙しい。ポップ引き籠りで忙しい。

望んだはずの世界になったはずなのに、ポップとフレイザードちゃんには距離が出来てしまった。

終．大魔道士と聖女

「……今日もポップに会えなかった」

フレイザードちゃんは日に日に落ち込んでいった。ポップに言ったあの事を激しく後悔していた。結果を見れば、反共存派が集ったオーザムをほとんど犠牲も無く傘下に納めたのだ。魔王軍の被害はマジンガー鬼岩城とポップの風評のみだ。冷静になったフレイザードちゃん視線で見ると、ポップは自身を犠牲にして世界を平和に治めて見せた事になる。そんな事実は無いが結果としてそうなった。フレイザードちゃんが何度も足を運んでもポップは会わなかった。

嫌われた。

ポップは私の為に動いてくれたのにと、思い出すだけでフレイザードちゃんは泣いてしまう。フレイザードちゃんは最近まともに寝れていなかった。せめてもと各地の入植を円滑に済ませる為に必死にフレイザードちゃんは頑張った。仕事をしている時だけ、辛い思いを紛らわせる事が出来ていた。

許してもらえなくてもいい。せめて直接謝りたい。

そうフレイザードちゃんは思っていた。フレイザードちゃんは精神的に追い詰められていた。そんなある日、疲れきったフレイザードちゃんは不思議な夢を見た。それはダイとポップが冒険する夢。アバンの使徒が大魔王バーンと戦う夢。勇者ダイと大魔道士ポップの物語だった。……自身の姿や性格は正直見て見ぬふりをするしかない、というかあれが自分だと考えたくもないが、その物語は実際あり得た物語だと思えてしまった。フレイザードちゃんの愛するポップの影響が無かった世界ならば。

そういえばメルルが、未来はポップが変えたと言っていた事があった。メルルは先ほどの夢の事も知っているのだろうか。フレイザードちゃんは思い立ち直ぐにＫＯＰ城に飛びメルルに会った。

「……はい、知っていますよ」

私室で迎えてくれたメルルがそうフレイザードちゃんに言った。ならば、ならば、だ。

「じゃあ……バーン様の目的は地上の支配ではなく、魔界に太陽の光を与える事……それじゃあ！」

大魔王バーンにとって魔王軍による地上侵攻はただの遊戯だったはずだ。その目的が変わっている、はずがあるのだろうか。

「メルルは、メルルは見えてるの!?　この先の未来!?」

「……ごめんなさい。私が見えていたのはポップが地上の新たな世界の王となる、そこまでなの。……フレイザードちゃん?」

「私、バーン様に会ってくる。地上を消す必要なんてどこにも無い。きっと、きっと分かってくれる……!?」

大地が揺れた。同時に凄まじい魔力を感じた。フレイザードちゃんは悟った。夢で見た、大魔宮が、バーンパレスが浮上したのだと。大魔宮が動き出したのであればもはや時間が無い。大魔宮のあった死の大地から一番近いオーザムが危ない。

「私ならルーラでバーンパレスに入れる、私行くね！」

「フレイザードちゃん！」

日頃からバーンの遊戯の相手でもあったフレイザードちゃんは幾度もバーンパレス

に通っていた。対人の結界も魔王軍ならば通過可能、ましてフレイザードちゃんは人でも無いのだ。この時ばかりは自身の身体に感謝した。フレイザードちゃんは飛ぶ前にポップの部屋の前に寄った。扉越しに話しかける。

「……ポップ、あの、待っててね。すぐ終わらせてくるから」

フレイザードちゃんは扉の前でそれだけ告げ、返事を待たずに駆け出しバーンパレスに飛んだ。現在、バランは不在である。他の誰かを連れていくか少し迷ったが、フレイザードちゃんは単騎で乗り込んだ。時間が無いのもある。それに、バーンの真意を確かめたかった。チェスで遊んでいた、フレイザードちゃんにとって良くしてくれた相手の一人の真意を信じたかったからだ。フレイザードちゃんは玉座のある間まで一直線に飛んだ。玉座にはバーンとミストバーンがいた。ミストバーンをチラリと見る。あの夢があり得た事実というのであれば、ミストには真なるバーンの身体が凍れる時間の秘宝により眠っているのだ。戦闘になれば一人で勝てるだろうか。頭に過った不安。先にバーンがフレイザードちゃんに話し掛ける。

「フレイザードよ、見事であろう？　このバーンパレスは」

「うん、すごいね。……バーン様、率直に聞きます。地上を消すつもりですか？」
「愚問だな」
「何故！」
「何故？　何故だと？」
「地上を、吹き飛ばすというのであれば、その残骸は魔界に降り注ぐ事になるでしょう！
　それは魔界も滅ぼす事になるのではないですか！」
「確かに魔界の一部はそうなるであろうな」
「でしたら！」
「脆弱という理由だけで太陽の恵みを人間に与え、魔族や竜族を暗い魔界に押し込めた神々共に力こそが正義である事を教えてやる。魔界に太陽の光を差し込む事は数千年生きた余の悲願である。生まれて間もない貴様などに分かるはずもない」
「バーン様……貴方は……貴方の故郷である魔界を救う、そう言うのですね。……であれば！」

　フレイザードちゃんは瞬時に光の弓矢を造り出した。先手必勝。
「私はポップのいる、この地上の為に大魔王を倒す！　メドローア!!!」
「ちッ」

フレイザードの得意呪文、ポップから教わった極大消滅呪文メドローア。時間が止まっていて物理的な干渉が一切できないものだろうが、問答無用で消滅させる強力無比な呪文。ただし、あくまでも「魔法」であるためにそこが唯一の弱点となっている。最大の弱点として挙げられるのが魔法反射でマホカンタやこれと同様の効果のある手段ではじき返すことができ、防御手段が非常に少ないために、跳ね返されるとそのまま自分達の全滅に繋がってしまう。また通常の攻撃呪文と同じく、同じ呪文、つまりメドローアをぶつけることで相殺できる。さらに魔法力そのものを吸収・無効化してしまうものには効果が無いというかなり致命的な弱点を持つ呪文である。

呪文の弱点はフレイザードちゃんも把握している。そしてバーンがマホカンタを使える事も。それでも不意討ちであればと、狙いをミストバーンに定め渾身の一撃を放った。メドローアの矢がミストバーンを貫くかに見えた。が。

「……うそ」

「……。」

メドローアの矢が、ミストバーンの前で消滅した。正確に言えばミストバーンの手で払われ掻き消された。呆気にとられ一瞬の隙が出来たフレイザードちゃんに向けミストバーンが鋭い爪を高速で伸ばす。

「しまっ……」

鋭い爪がバーンの身体を襲う！
「くっ！」
バーンが間一髪で避ける。
「ちっ、外したか」
「どういうつもりだ、ミスト」
「どういうつもりだ、だって？　最近ずっとあんたに張り付いて首狙ってただけだよ！」
ミストバーンの身体が変身する。魔法による変質が溶け、現れたのはフレイザードちゃんの愛しき人。原作でカイザーフェニックスを分解して見せたポップは、自身の切り札でもあるメドローアをその手で分解して見せた。内心冷や汗だらだらだったのは言うまでもない。
「ポップ！」
「フレイザードちゃん、あの、この間はごめんな。最近バーンに張り付いててさ。ちょっとこのジジイ片付けてゴタゴタ全部終わらせるから待っててね！」
「ううん、ポップ、私も一緒に戦うよ！」
魔王と聖女が並び立つ。
「……ミストはどうした」
「ああ、キルバーンの持ってた鎌で異次元に放り込んでバランとダイの竜の騎士コンビ

が相手してるぜ。もう死んだんじゃね？」
「……いいだろう！　余が相手をしてやろう。ポップ、大魔王に魔王が勝てると思うな」
「は？　じゃあ魔王は辞めだな。……そうだな、俺を呼ぶなら大魔道士とでも呼んでくれ！」

大魔道士と聖女は魔界最強とされる実力者であり、神をも凌駕する圧倒的な力を持つ大魔王の前に立った。既に大魔王の若き肉体は大魔道士の策略により封じられてられている。しかし、数千年生きた大魔王の誇りは圧倒的な力を二人に見せつける。史上稀に見る激闘が、そして二人の初めての共闘が始まった。

昔、小さな村の武器屋に生まれた一人の男の子がいました。その男の子は村に訪れた勇者に憧れ、その勇者と共に旅に出ました。
男の子は真面目に修行し、勇者に認められ次は魔法使い、その次は武闘家と勤勉に学びました。少しいたずら好きな男の子でしたが、その人柄と実力が認められ旧パプニカ王国の姫の家庭教師を幼いながらに勤める事になりました。
男の子はパプニカで疑問に思います。何故人間と魔族は仲良く出来ないのだろうか

と。パプニカには旧魔王軍の爪痕が深く残っていて、男の子は街に出ては見て回り嘆いたそうです。男の子は決意しました。人間と魔族が仲良く出来る世の中にするんだと。

まず男の子はモンスターと仲良くなったそうです。一緒に遊び、共に闘い絆を結んだそうです。そうしているうちに、魔界の王から誘いが来ます。「私と共に新しい世を作らないか」と。

男の子は、人間から魔王と呼ばれるようになりました。辛い日々だったようです。そして男の子は一人の魔族の女の子と出会います。魔王は彼女と夢を共有し、二人は力を合わせて世界を変えていきます。

女の子も魔王の為に、自ら傷つきながらも人と魔が共に笑って暮らせる世の中を信じて道を歩きます。やがて女の子は聖女と呼ばれ、その清らかな心は人と魔を繋いでいきます。

魔王と聖女の説得に応じた国々は、魔族を受け入れ、魔族と共に暮らす新な世の中が出来上がりました。そして魔界の王の望みである魔界に光をという願いを知った魔王と聖女は協力し、その強大な力で死の大地と呼ばれていた氷の大陸に大穴を開け、この世界が始まって以来初めて魔界に太陽の光をもたらし魔界の王の願いを叶えたそうです。

魔王は人々からその勇気を讃えられ勇気ある王と、そして魔界の王からも世界の理を

変えた始まりの王と呼ばれるようになりました。その王の傍らにはいつも聖女と、彼の仲間が人も魔も関係無く笑顔で過ごしていたと言います。

これが後の世にて始まりの王と呼ばれるポップの物語です。

おまけ

――バーン戦にて

「フレイザードちゃん、俺に手がある。……バーンよ、凍れる時間の秘宝。俺も使えるとしたらどうよ？」
「……何？　だからどうだと言うのだ」
「ポップ、それ皆既日食の時しか使えないって奴じゃ……」

フレイザードちゃんはポップに言う。今日は皆既日食では無いのだから。

「まぁ見ててくれって。……行くぞバーン！」
「……ッ!!!!」

ブリブリブリブリブリブリブリブリブリブリブリブリブリブリュッブブブブッブッ

……

……

……

時が、止まった。

「猛虎破砕拳!」

ポップが壮大にうんこを漏らした事で、場の空気が完全に凍り付いた。その一瞬の隙を見逃さず、ポップの渾身の一撃がバーンの腹を捉えバーンが吹き飛び壁に勢い良く叩きつけられる。

「ぐっ……なぁ!?　カイザーフェニックス!!!」

壁に叩きつけられたバーンは信じがたいものを目撃した。瞬時にズボンとパンツを脱ぎ捨てたポップは汚物がこびりついたそれを全身の筋肉を最大限に膨張させながら

渾身の力を込めてバーンに投げつける。汚物付きのそれを喰らった所で、勿論肉体にダメージなど無い。ただ大魔王としてそんな屈辱を許せない。大魔王の最高の一手の一つであるカイザーフェニックスにて汚物を空中で迎撃したバーン。あんな物の為に自慢の呪文を使わされた事に憤りを感じても仕方ないと言える。

「はっはっはっはっは！　どうだバーン！　時は凍っただろう！」

「くっ、なんて奴……」

「ポップ、それ凍れる時間の秘宝というよりメガンテだよお……」

フレイザードちゃんが赤面し両手で目を覆いながら言う。

「バーン！　俺の話を聞け！」

「……なんだというのだ。お前は一体なんなんだ」

「地上が崩壊すれば魔界も瓦礫で埋まり誰もが住めなくなる！　ならば地上の一部のみに穴を開け、魔界に光を届け両方を支配すればお前の望みも叶うであろう！」

ポップはビシッとバーンを指差しながら叫ぶ。フルチンで言う台詞ではないと思う。

「ふん、ならば今すぐに開けてみろ。貴様に出来るというのか？」

「お、言ったな？　ま、多分もうすぐ……」

ドオオオオオオオオオオ

激しく爆発音と共に世界が揺れる。
「な、何!?」
「ポップ!?」
「いやー多分メルルがそろそろやるんじゃないかなぁーって思ってたけど、タイミングばっちりだね」
「一体何をしたというのだ」
「黒の核晶で死の大地を吹き飛ばしましたー。てへぺろ」
ちなみにポップとメルルはまったく打ち合わせなんてしていない。ポップは多分メルルならやると思ってただけだし、メルルはそろそろポップが望んでいると確信しやった。ただそれだけである。
「何故貴様が黒の核晶を……」
「だってキルバーンの中にあったから……もったいないよね?」
「そうか……ヴェルザーめ……!?」
「チェックメイトだよ、バーン」
バーンの意識は完全にポップに向いていた。フレイザードちゃんから意識が離れていた。その隙を見逃さずフレイザードちゃんは気配を消し移動、バーンの側頭部に光の矢が突き付けられる。

「魔界では力こそが正義……だって言ったよね？　今日、今だけはその流儀でいかせてもらうよ。お願い。降参して。……チェス、一緒にやるの私の楽しみなんだよ」
「……ふ、ふはははははは!!」
バーンは笑った。この男の奇行は神ですら見破れぬだろうと。
「……ポップ、フレイザード、二人の好きにするが良い」
「んじゃ、バーンこれからも宜しくな！」
ポップはバーンに歩み寄り右手を差し出した。バーンは一瞬躊躇ったが握手した。実に感動的である。フルチンで無ければ。
「ポップ、そろそろ何か履いてよぉ……」
フレイザードちゃんの視線は常にポップから外れている。恥ずかしがってるフレイザード可愛い。

こうして歴史から抹消された闘いの幕が閉じた。ポップの物語は幾つもの本となって後世に伝わっているが、この闘いの事実を知るものは三人と占いの玉で見ていたメルル以外いない。